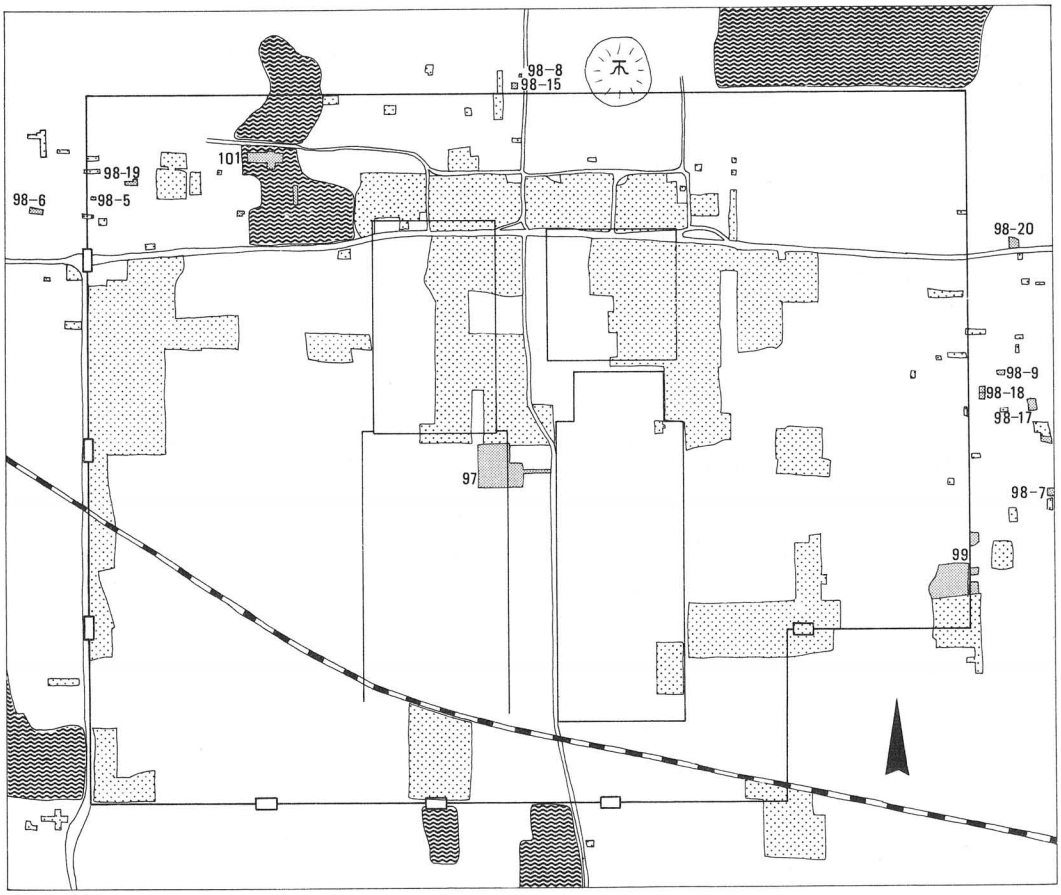
昭和51年度 平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報

昭和５２年５月

奈良国立文化財研究所



第１図　平城宮発掘調査位置図

表紙カットは第99次調査出土緑釉香炉蓋復原図

目　　次

Ⅰ　推定第１次朝堂院地区の調査（第９７次）…… 3

Ⅱ　東院園池と周辺の調査（第９９次）…… 12

Ⅲ　佐紀池の調査…… 22

Ⅳ　薬師寺西塔の調査…… 30

Ⅴ　法華寺周辺の小規模調査…… 34

Ⅵ　その他の発掘調査…… 40

昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和51年度の発掘調査を第1表のように実施した。本年度は、昨年に比して、小規模な発掘が増加しており、平城宮周辺の地形変更が再び活発化した傾向を示している。

次数	調査地区	面積	調査期間	備考
97	第一次朝堂院東第1堂	3,350m²	76年 4.1～7.24	
98－1	右京北京極および北辺坊(奈良市山陵町105-1.106-1)	200	4.12～4.21	奈良ファミリー駐車場
2	平城宮東面大垣外 (〃 法華寺中町662)	7.5	5.11～5.13	西口武雄氏宅
3	平城宮佐紀池 (〃 佐紀西町2647－2)	14	5.17～5.18	高村みよ子氏宅
4	法華寺旧境内 (〃 法華寺町630)	15	6.15	奥村雅則氏宅
5	平城宮馬寮北方 (〃 佐紀町2590)	5.2	6.28	吉田平蔵氏宅
6	右京一条二坊二坪 (〃 二条町1-29-1.2)	100	7.1～ 7.5	尾埜善一氏宅
7	法華寺旧境内 (〃 法華寺町630－16)	90	8.12～8.19	久保敏一氏宅
8	平城宮北面大垣外 (〃 佐紀町2777-1.2)	4	8.30	石田ふじ江氏宅
9	法華寺旧境内 (〃 法華寺町655)	9.5	9.2～ 9.3	川崎健治郎氏宅
10	平城宮大膳職北方 (〃 佐紀町2770)	24	11.16～11.18	三桝護氏宅
11	右京二条一坊小路 (〃 二条町1－1－7)	28	12.9～12.15	光橋静徳氏宅
12	〈欠番〉			
13	東大寺旧境内 (〃 雑司町97)	58	77年 1.10～1.19	鼓阪幼稚園
14	右京五条条間路等 (〃 五条町、平松町)	28.5	1.19～3.30	奈良県浄化センター
15	平城宮北面大垣外 (〃 佐紀町2777-1.2)	11.5	2.9～2.14	石田勇氏宅
16	西大寺境内 (〃 西大寺芝町)	24	1.26～1.28	西大寺
17	法華寺境内 (〃 法華寺町882)	122	2.3～ 3.1	法華寺
18	平城宮東面大垣外 (〃 法華寺中町662)	63	2.15	西口武雄氏宅
19	平城宮西北宮衙地区 (〃 二条町1－2595)	17.1	2.15	横田進氏宅
20	平城宮東大宮垣外 (左京一条二坊十坪) (〃 法華寺町935－2)	86	2.22～2.29	川崎泰信氏宅
21	法華寺旧境内 (〃 法華寺町630－24)	70	2.28～ 3.5	川崎裕久氏宅
99	東院園池	2,797	76年 7.26～77年 1.19	
100	右京五条四坊三坪 (奈良市平松町312)	2,360	76年 8.19～10.8	奈良市（学校建設）
101	平城宮佐紀池 (〃 佐紀町2655外)	1,294	77年 1.7～3.25	
その他	右京五条一坊三坪 (〃 五条町202－1)	40	76年 10.19～10.28	奈良県浄化センター
	東大寺旧境内 (〃 水門町98－99)	250	12.4～12.15	整肢園
	東大寺西面大垣 (〃 今小路町45－1外)	335	4.21～6.23	奈良県労住協
	薬師寺西塔 (〃 西ノ京町460)	550	7.5～8.25	薬師寺
	法隆寺境内 (生駒郡斑鳩町法隆寺)	664	9.27～12.11	法隆寺
	東大寺旧境内 (奈良市雑司町406－1)	60.6	77年 3.28～ 4.4	東大寺学園

第1表　昭和51年度発掘調査一覧表

Ⅰ　推定第１次朝堂院地区の調査（第97次）

平城宮跡第97次発掘調査は、推定第１次朝堂院地区の東北部（６ＡＢＳ－Ａ・Ｂ、６ＡＢＦ－Ｂ地区）で行った。この地区は１９６７年に発掘した推定第１次内裏地区を囲む築地回廊の南側に位置し、朝堂建物に推定されている土壇が残存している。調査は１９７６年４月１日から開始し、７月２４日に終了した。その調査面積は3,３５０㎡である。

１　遺　構

平城宮造営以前、この地域は北から南に下る傾斜地で、６ＡＢＦ－Ｂ地区の中央部でもっとも低く、浅い谷状を呈する地形が想定できる。旧地表面は谷筋に沖積した軟弱な黒色粘土によって覆れている。この奈良時代地山面にともなう遺構には、溝４条、土壙１などである。その後、谷を埋める大規模な整地が施工されており、黒色粘土の地山上に積む盛土整地は大きく三層に分かれ、ここでは下から第Ⅰ盛土層・第Ⅱ盛土層・第Ⅲ盛土層とよぶ。

検出した主な遺構は建物４棟、塀および築地４条、溝１２条、瓦敷面１個所、井戸１基、土壙２穴、円筒埴輪列１列などである。これらの遺構は盛土層を基準にして４期に分つことができ、以下時期別にのべることにする。

Ａ　期

平城宮造営以前の遺構で、古墳跡と４条の溝と浅い土壙がある。

古墳跡、６ＡＢＦ－Ｂ地区の東限で、原位置にある２本の円筒埴輪を検出し、この付近に埴輪片の散布が顕著であった。円筒埴輪の間隔は約２.５ｍであり、墳丘の最下段に樹立したものかもしれない。また、西方に下降する地形は周濠の名残りかもしれない。ただ発掘面積が狭いことなどから墳形を想定する手掛りはない。

溝ＳＤ８３７２は６ＡＢＳ－Ａ地区の北部にある東西方向の溝である。発掘区の西端から２６ｍを検出した。溝の底にわずかに水の流れた痕跡をとどめ、その上部を第Ⅰ盛土層で埋立てている。この溝は平城宮の南北をほぼ２等分する位置にあたる。溝ＳＤ８３７３は溝ＳＤ８３８０の南方１０.５ｍ離れて平行して流れ

る溝で、発掘区の西限から約２０ｍを検出した。２条の溝は堆積土に遺物を含まないが、方位や堆積状況が一致しており、同時期のものとみられる。

溝ＳＤ８３８０は溝ＳＤ８３７３の南１２.５ｍ離れて東西に流れる溝である。発掘区の西限から３１ｍを検出した。この溝は東で南へ若干振れており、溝ＳＤ８３７３と関係するか否かは不明である。溝ＳＤ８３８５は溝ＳＤ８３８０の南２５.５ｍ離れて東西に流れる溝。溝ＳＤ８３８０と同様に南へ傾き、発掘区西限から約１０ｍのところで基壇建物ＳＢ８４００の掘込地業によって破壊されている。

土壙ＳＫ８４１８は６ＡＢＳ－Ａ地区東辺から東にひろがる浅い土壙で、うちに桧皮や木材の加工片が約１０cmの厚さで堆積している。造営時の作業木屑を棄たもののようである。今回の調査区の北方に位置する第９１次調査でも同じような状況がみられ、そこでは和銅年間の造営を示す木簡をふくんでいた。

Ｂ　期

第Ⅰ盛土層は灰白色粘土と青灰色砂からなり、もっとも厚い部分では５０cmに達している。この盛土のうえに構築する遺構がＢ期に属し、溝と塀とがある。

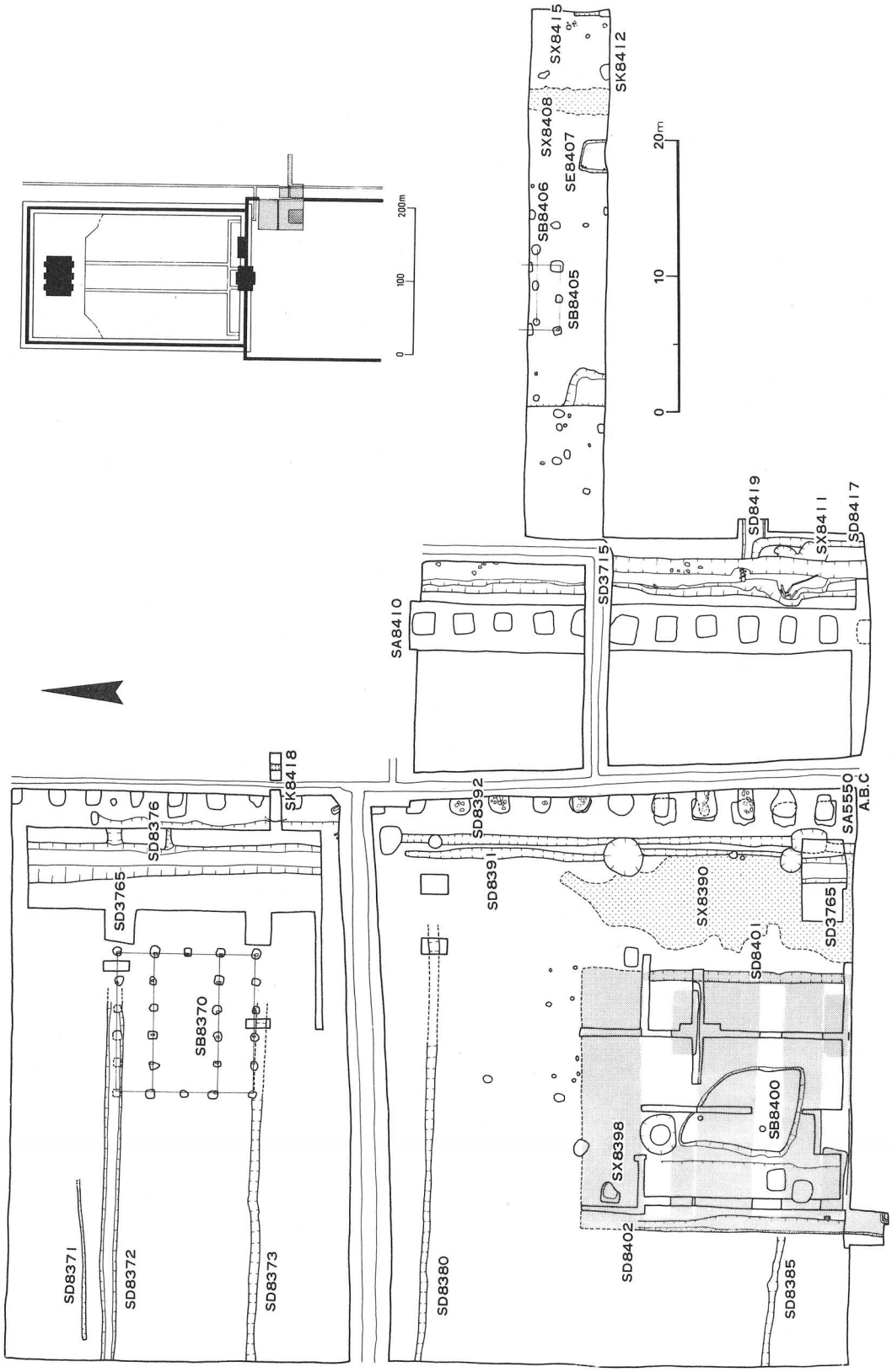
溝ＳＤ３７６５は６ＡＢＳ区の東限から約５ｍ西に位置する南北に流れる大溝で、第Ⅱ盛土層を除いて検出した。この溝の所在は先年の調査で確認しており、遺構の保存上Ａ地区のみについて発掘し、発掘区南限の土層観察用トレンチにおいて、さらに南流することを確認した。溝の堆積は上下二層に分れ、下層からは奈良時代初期の瓦や土器が出土した。溝ＳＤ８３７６は東岸から大溝へ注ぐ溝であるが、発掘範囲が狭く性格不明。

塀ＳＡ８４１０は溝ＳＤ３７６５の東方１７.５ｍに位置し、南北にのびる掘立柱塀である。柱穴１１間分を検出し、その柱間は約３ｍである。

Ｃ　期

第Ⅱ盛土層は灰褐色粘土からなり、６ＡＢＳ－Ａ・Ｂ地区の東半にひろがり、厚いところで約４０cmであった。この盛土上に構築する遺構がＣ期に属し、遺構として塀と溝とがある。

塀ＳＡ５５５０Ａは６ＡＢＳ区の東限を画する畦畔に沿って南北にのびる掘立



第２図　第97次調査遺構図

柱塀で、先年の調査で北方から南下することが確認されている。柱穴は第Ⅱ盛土層上から掘込むか、上部に第Ⅲ盛土層とD期の築地積土が覆っているので、部分的な検出にとどまるか、柱間は約3 mであった。第41次調査においてこの塀が推定第1次内裏の築地回廊に曲尺形にとりつくことが判明しており、今回検出の南限までが26間（77 m）ということになる。この塀は推定第1次朝堂院の東面を画する施設で、推定第1次内裏中軸線から約107 m（360尺）東に位置し、これによって朝堂院の東西幅員を214 m（720尺）に想定することができる。

溝SD3715はすでに北方地域で確認されており、平城宮の中心部を南北に貫通する幹線水路である。塀SA5550Aの東方18 mに位置し、溝SD3765の後身とみられ、奈良時代の全般を通じて存続する。溝は2回の改修を受け、堆積土は上・中・下の三層に区分できる。下層出土の木簡には神亀から天平初年の年紀があり、堆積の年代をたどることができる。また、上層からは奈良末平安初期の土器片が出土している。溝SD8419は幹線水路に東から注ぐ溝であり、溝SD3715の上層の時期以前に廃絶している。

会所SX8411は溝SD3715の流路に付設する。一辺4 m程の方形を呈し、上流部分に杭列とそれに落込んだ板材の一部が残存している。この遺構には溝SD3715の下層の堆積土である暗灰色粘土が堆積しており、木簡が多く出土した。

D　期

第Ⅲ盛土層は褐色粘土からなり、6ABS区にひろがり6ABF区におよんでいない。推定第1次朝堂院の東面を限る塀が築地に改造され、その内側に掘込地業の基壇建物がつくられる。

基壇建物SB8400は東第1堂に推定してきた土壇の周囲で検出した。基壇は掘込地業を行っているので、上部を消失していてもその平面形をたどることはできる。今回は南北棟基壇の北部を検出し、東西幅約19 m、南北長20 m以上でさらに南の発掘区外にのびることが判明した。現存土壇の上半部は後世の盛土であったが、下半部に約50 cmの高さで基壇積土をのこしている。削平がひどく

柱位置や基壇化粧の痕跡はない。基壇の東西の辺縁には幅５０㎝内外の浅い溝がある（ＳＤ８４０１、ＳＤ８４０２）。

基壇の掘込地業は第Ⅲ盛土層を切込んで行う。地業は基壇の全域について行っていない。東西の長辺に幅0.８ｍの溝を掘り、これを東西方向の布掘地業でつなぐ。つまり、北辺から4.５ｍ、8.６～１3.０ｍ、１4.８～１7.６ｍ、１9.６～２2.３ｍの４個所に布掘りし、北から一番目と三番目の掘残し部分に、東・西寄りに2.０×5.５ｍ内外の長方形の坑を掘る。このような掘込地業は３０～５０㎝の深さで残存し、整地層の上面まで粘質土で粗くつき固めている。整地層から上の基壇はバラス混り粘質土と砂質土を用いて、下部よりも丁寧に版築している。このような掘込地業の形状は、必ずしも柱位置と一致しておらず、建物の全貌を検出したうえで再考したい。基壇の西北隅に１個の礎石が残存するが、すでに原位置から移動している（ＳＸ８３９８）。花崗岩製で柱座の造出しをつくるが、２次的に半割面を平滑にして再使用したもののようである。

基壇建物の東側に瓦敷ＳＸ８３９０がある。瓦敷は基壇の東辺から東面築地ＳＡ５５５０Ｂの間にひろがるが、基壇北辺のあたりで疎らになって消失する。

築地ＳＡ５５５０Ｂは東面を画する塀ＳＡ５５５０Ａの後身である。第Ⅲ盛土層の上面に南北にのびる帯状の黄褐色粘質土からなる積土があり、築地土壇の積土にかんがえられる。残りのよい部分では、なお４０㎝程度の厚さをとどめている。この築地に沿って南北にのびる溝ＳＤ８３９２が西側の雨落溝である。

塀ＳＡ５５５０Ｃは築地ＳＡ５５５０Ｂを掘立柱の塀に改作したものである。柱間は約３ｍで、２１間分を検出した。この塀の柱心はＣ期の塀ＳＡ５５５０Ａの柱心から東へ５０㎝移動している。溝ＳＤ８３９１は掘立柱塀にともなう排水溝である。

掘立柱建物ＳＢ８３７０は基壇建物ＳＢ８４００の北縁から２４ｍ北方にあり、西妻を基壇の中軸線にそろえる。５間（１0.１５ｍ）×４間（１0.１５ｍ）、南北廂付の東西棟建物で、柱間は桁行２ｍ、梁間2.４ｍ、廂間2.７ｍで、柱掘形の底には礎板を敷く。

溝ＳＤ8417は大溝ＳＤ３７１５の東岸にＬ字形にとりつく。会所ＳＸ８４１１の廃絶後に支流として設けたもので、大溝に沿って南流する。

掘立柱建物ＳＢ８４０５、ＳＢ８４０６は、６ＡＢＦ－Ｂ地区で重複する柱穴で、南北棟建物の一部に想定しうる。井戸ＳＥ８４０７は建物ＳＢ８４０５・ＳＢ８４０６の東南にある。掘形は一辺2.5ｍの方形を呈し、深さは約1.0ｍ、底に礫を敷く。井戸底の四隅には凝灰岩や玉石を据えており、井戸枠の隅柱の据付痕跡とみられる。出土遺物からすると、奈良時代中期に掘鑿し末期に廃絶していることがわかる。

井戸ＳＥ８４０７の東に瓦溜りＳＸ８４０８がある。瓦片が南北方向にのび、西方に向って下降する。瓦片は整地土とともに敷かれており、整地の地固めに瓦片を敷いたものらしい。土壙ＳＫ８４１２は瓦溜りの東側にある土壙で、北半分を検出し、なかに奈良時代末期の土器があった。

2　遺　物

木　簡

木簡は主として大溝ＳＤ３７１５とそれにともなう会所ＳＸ８４１１から出土した。ほかに溝ＳＤ８４１９からも出土したが、きわめて少ない。

大溝ＳＤ３７１５から２０点、会所ＳＸ８４１１から１３８点出土している。大溝ＳＤ３７１５では下層の堆積土である暗灰色粘土層から出土し、会所ＳＸ８４１１では杭や板材の残る南北の暗灰色粘土層から出土した。大溝ＳＤ３７１５と会所ＳＸ８４１１の暗灰色粘土層は同一層位であり、ここでは一括してあつかう。それらの木簡はまとまった性格を示しており、神亀から天平初年に至る間に宮内で行った造営事業に関するものである。以下代表的なものを例示しよう。

1　□□□□　里工作高殿析短枚桁二板　□□

これと類似する木簡に「西高殿四人」、「□東高□□□□□□□□（殿カ）（駄カ）」の２点がある。造営の殿舎名を記する貴重な例である。

2・右二人丸桁二枝　継目口引坐　田部大嶋宗小斗　□□四村　口引座

□□□　□
引坐又丸桁一枝　端錆

建築木材の出納に関係する木簡である。他に柱作の割当表のごときものもある。

・進上瓦三百七十枚　女瓦百六十枚宇瓦百卅八枚　鐙瓦七十二枚　功卌七人　十六人十枚廿三人各六枚　九人各八枚

・付葦屋石敷　神亀六年四月十日穴大□　主典下道朝臣向司家

屋根瓦の供給伝票である。瓦の運搬経路を示しており、はじめての出土例である。ほかに「□〔宇カ〕瓦卌枚□車一□〔両カ〕」と記するものもある。

4　申　木屋司御前

造営の官司を書く。造営の工夫を記すものとしてさきの里工や「雇工」があり、「飛□〔騨カ〕」と読うるものもある。「五年四月内荒田井大夫銭□〔拾カ〕」の木簡は重要である。荒田井氏は渡来系氏族であり、同族には土木工事にたずさわったものがいる。この木簡の荒田井大夫も造営に関与している可能性がつよい。

5・　式部省召　中務省　陰陽寮　右大舎人寮　内薬司　右省

・　潤□〔三カ〕月十六日

この木簡は式部省からの召喚文書である。

瓦　類

今回の発掘調査では、軒瓦４２５点、鬼瓦片３点、隅木蓋瓦片、面戸瓦１１点のほか多量の丸・平瓦が出土した。

軒丸瓦は６ＡＢＳ区で８９点、６ＡＢＦ区で１８３点、合計２７２点出土した。量的に顕著なものには、６２２５型式（２３％）、６３１１型式（１４％）、６２８４型式（１３％）がある。時期別にみると平城宮瓦第Ⅰ期に属するものは約２１％で、大多数の６２８４型式瓦と小量の藤原宮式（６２７３、６２８１型式）で構成されている。平城宮瓦第Ⅱ期が残りの７９％を占め、そのうち６２２５型式、６３１１型式がとくに多い。平城宮瓦第Ⅲ期以降の軒丸瓦は発見されていない。

軒平瓦は６ＡＢＳ区で５５点、６ＡＢＦ区で９８点、合計１５３点の出土である。そのうち量的に多いのは６６６３型式で全体の３４％を占める。平城宮瓦第Ⅰ期の軒平瓦は、６６６４・６６６５型式と藤原宮式（６６４２・６６４３型式）

とであり、全体の３２％を占める。平城宮瓦第Ⅱ期の大部分は６６６３型式であり、これに６６６４・６６８５型式が加わり、全体の５６％を占める。平城宮瓦第Ⅲ期の軒平瓦としては６６９１・６７３２・６７２１・６６８９型式があり、１０％を占める。平城宮瓦第Ⅳ期のものとしては６８０１型式が２点あるにすぎない。

土器類

奈良時代の遺構にともなう土器類は、ＳＤ３７１５・ＳＥ８４０７・ＳＢ８３７０・ＳＫ８４１２・ＳＢ３７６５などから出土した。井戸ＳＥ８４０７からはまとまりのある土器が出土した。井戸廃絶時の埋土からは平城宮土器Ｖ（７８０年頃）の土器が出土し、井戸自体の堆積土中には平城宮土器Ⅲ（７５０年頃）の特徴をもつ一段放射暗文のある土師器杯Ｂがある。ＳＢ８３７０の柱掘形からは平城宮土器Ｖの土師器ⅢＡが出土しており、建設の年代が推測できる。土壙ＳＫ８４１２からは平城宮土器Ⅳ（７６５年頃）に属する土師器椀Ａが出土した。大溝ＳＤ３７６５出土の土器は各種の器形をふくみ、奈良時代当初の土器群を構成している。

そのほかの土製品としては、蓋や杯を転用した硯、土錘、フイゴの羽口、漆付着の土器、灰釉陶、白磁などがあるが、多くは整地層などに包含している。

木製品

木製品の大半は大溝ＳＤ３７１５から出土した。多くは板状品、棒状品などの原形が不明のものである。製品として確認できるものとしては、人形１、匙１、車輪部材１、箸１２、付札７、箆１１、円板５、形代１があり、奈良時代における古い様式をよく伝えている。

3　おわりに

今回の発掘区の北方に展開する推定第１次内裏地域については主要部分の調査を終了し、おおよその状況が判明している。その成果に今回の発掘調査成果を照合してみよう。

推定第１次内裏地域の遺構はＡ・Ｂ・Ｃの３期に大別されている。いまのとこ

ろＡ期は和銅から天平勝宝以前（４小期にわかれる）、Ｂ期は天平宝字～宝亀初年、Ｃ期は宝亀年間から天長年間と理解している。以下、内裏Ａ期、Ｂ期とよび、今回のＡ～Ｄ期と区別する。

Ａ期

和銅創建当初の短期間の遺構である。つまり、造営開始に伴って一時的に設けられたもので、溝ＳＤ８３７３に挟まれる部分は仮設道路のようなものであろう。溝ＳＤ８３７２が平城宮の南北２等分線に一致することから、造営時における地割計画の痕跡として理解することができる。この道路の西方に平城宮を東西に２分する下ツ道があり、これら２条の遺構が平城宮地割の基線になる可能性がつよい。

Ｂ期

内裏A_1期に相当する。従来の見解では、大溝ＳＤ３７６５の所在のみが知られていたが、東面を画する塀ＳＡ８４１０の発見は新知見である。ただ、この塀はいまのところ孤立しており、性格を明らかにしえない。

Ｃ期

内裏A_2期に相当する。大溝ＳＤ３７６５が東へ移動して、大溝ＳＤ３７１５を新に開鑿する。そして、推定第１次朝堂院地区の東面を塀ＳＡ５５５０Ａによって区画する。今回の調査ではこの期に属する朝堂相当の建物は検出していない。

Ｄ期

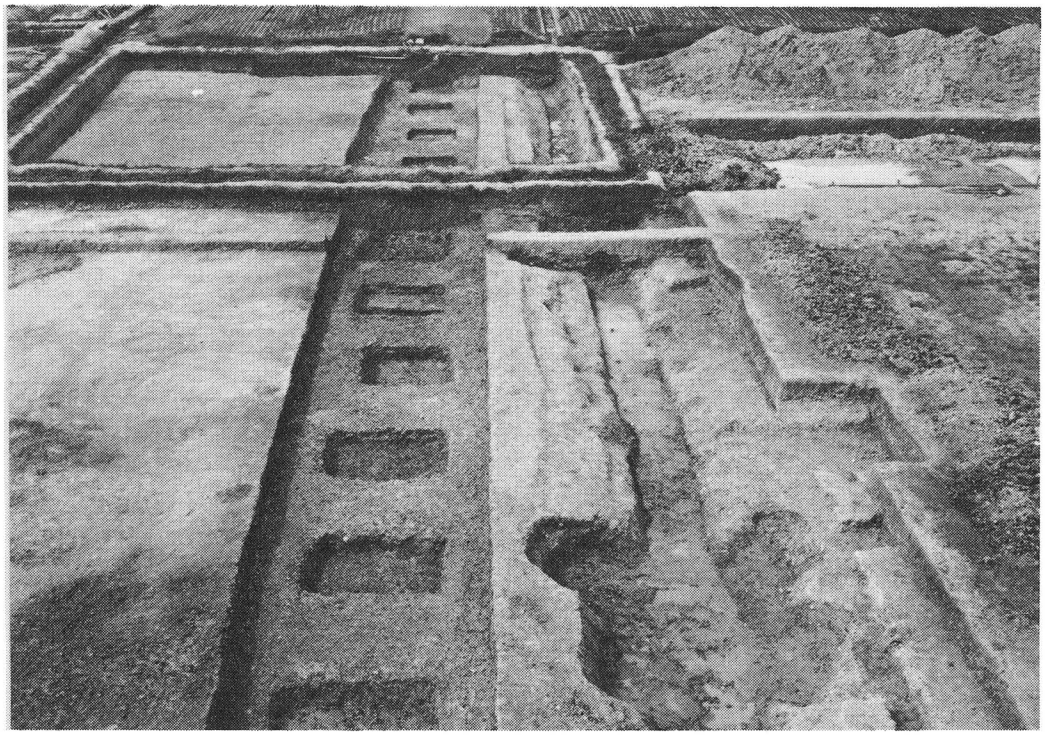
Ｄ期の開始は内裏A_3期に相当する。塀ＳＡ５５５０Ａを築地ＳＡ５５５０Ｂに改作し、そのなかに基壇建物ＳＢ８４００を建造する。この建物を「朝堂」の建物に比定するのであるが、規模や存続期間については不明瞭の部分があり、今後の調査に期待したい。いずれにせよ、この段階で推定第１次朝堂院地域は一応建設を完了する。

Ｄ期以降については、基本的な変化はなく、平城宮の廃絶時まで存続するようである。ただ部分的な改修は行われている。築地ＳＡ５５５０Ｂから塀ＳＡ５５５０Ｃへの建替が中心をなす改築である。また、奈良時代末期には各所に小規模な建物がつくられる。

今回の調査成果のうち、神亀～天平初年の造営資料そえたことは重要である。これまで、推定第２次内裏北外郭にある土壙ＳＫ２１０２出土の木簡によって造営の行われていたことが推定されてきたが、今回の木簡はさらにそれを補強する資料である。

文献上、この時期の記録は不鮮明だが、知造宮事や催造宮長官が設置されていることは注目すべきことである。すなわち、中納言藤原武智麻呂は養老５年９月造宮卿に任ぜられ、さらに神亀元年から４年まで知造宮事であった（家伝・公卿補任）。また、天平４年に中納言阿倍広庭は催造宮長官であった(続日本紀)。こうしたことは､この時期の造営がきわめて大規模であったことを示す有力な手掛りになるであろう。

木簡にあらわれる「東高殿・西高殿」の具体的な位置をしることは困難であるが、殿舎名を記録するものとして重要である。



第３図　塀SA8410と溝SD3715，会所ＳＸ8411（南から）

Ⅱ　東院園池と周辺の調査（第99次）

平城宮跡第９９次発掘調査は、東院地区東南隅にある園池跡を中心とする地域（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ・Ｅ・Ｄ地区）で行った。１９６７年度に行った第４４次調査で、東院をめぐる大垣およびその内側に展開する園池跡の一部を発見した。今回の調査はこの園池の規模を明らかにするとともに、北方に向って次第に高まる地形のもとで、東面大垣および外濠がどのように遺存しているかを確かめることを目的とした。

発掘調査は１９７６年７月２６日に開始したが、諸般の事情から８月１９日に一応中止するに至った。その後、１０月６日から発掘を再開し、１９７７年１月１７日に調査を終了した。

発掘地域は北方から舌状にのびる台地が、沖積地に移行する部分にあたり、地山は砂地で軟弱であり、地下水位がきわめて高い。以下園池地区（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ地区）と大垣地区（６ＡＬＦ－Ｅ・Ｄ・Ｈ地区）にわけて説明を行う。

Ａ　園池地区（６ＡＬＦ－Ｊ・Ｋ）

園池は上・下二層にわかれ、大規模な改修を受けている。発掘にあたっては、まづ上層遺構を検出し、その後に上層池のバラスの大部分を除去し、下層園池の全貌を明らかにした。このことから、遺構は大きくＡ・Ｂの２時期にわかれ、Ｂ期はさらに２小期に細分することができた。

１　Ａ期遺構

Ａ期の遺構としては、園池ＳＧ５８００Ａを中心に、掘込地業建物、石組溝がみとめられる。

園池ＳＧ５８００Ａは、上層園池ＳＧ５８００Ｂの下部にのこっていた。この池は大垣に沿って鍵手に屈曲してひろがり、東岸と北岸の汀線を確認するとともに西岸の一部も検出した。第４４次調査で検出した南岸から測ると、南北最大長約６０ｍとなり、東西最大幅約４５.２ｍとなる。

池の入江や岬は上層池によって破壊されている部分が多いが、大体の状況はたどることができる。東岸に岬２（ＳＸ８４５０、ＳＸ８４５２）と入江２がある。西岸には岬２、入江５がある。東岸の南半部分を除いて、周縁の池底に石敷が残存する。それは径３０㎝前後の扁平な安山岩を２～６ｍ幅で、地山の直上に敷きつめる。池の中心部分の底には石敷がみられず、細かい砂利を敷きつめている。地面から池に移行する岸辺は、地山を急斜面に掘りこみ人頭大の安山岩を積みあげた部分（西岸北方）とゆるやかな斜面に拳大の円礫を葦く部分とがある。こうした池は余り深くなく、現状では深さは５０㎝内外におさまる。

掘込地業建物ＳＢ８４８０は、下層園池の西岸が鍵手に屈曲し、半島状に張り出す部分につくる。遺構は東西に長い口字形の掘込地業である。幅2.5～３ｍ、深さ1.5ｍの掘形を南北１１.5ｍ、東西7.5ｍの範囲にめぐらす。掘形の底には人頭大の石を多数投げ入れ、その上で青灰色粘土と砂とを交互に積み固めている。礎石の存在を示す根石などは残っていない。このような掘込地業の上をＢ期の整地土（茶褐色粘土層）が覆っており、この建物の基壇はＢ期の改修時に徹底的に破壊されたことがわかる。なお、建物としては桁行３間、梁間２間程度のものが想定できる。

石組溝ＳＤ８４５６は下層園池の東北隅に流入する南北方向の溝である。幅１ｍ内外の掘形を掘り、底に扁平な石を敷き側石を立てたようだが、側石はすでに抜きとられている。ＳＧ５８００Ａに北方から水を供給する施設である。

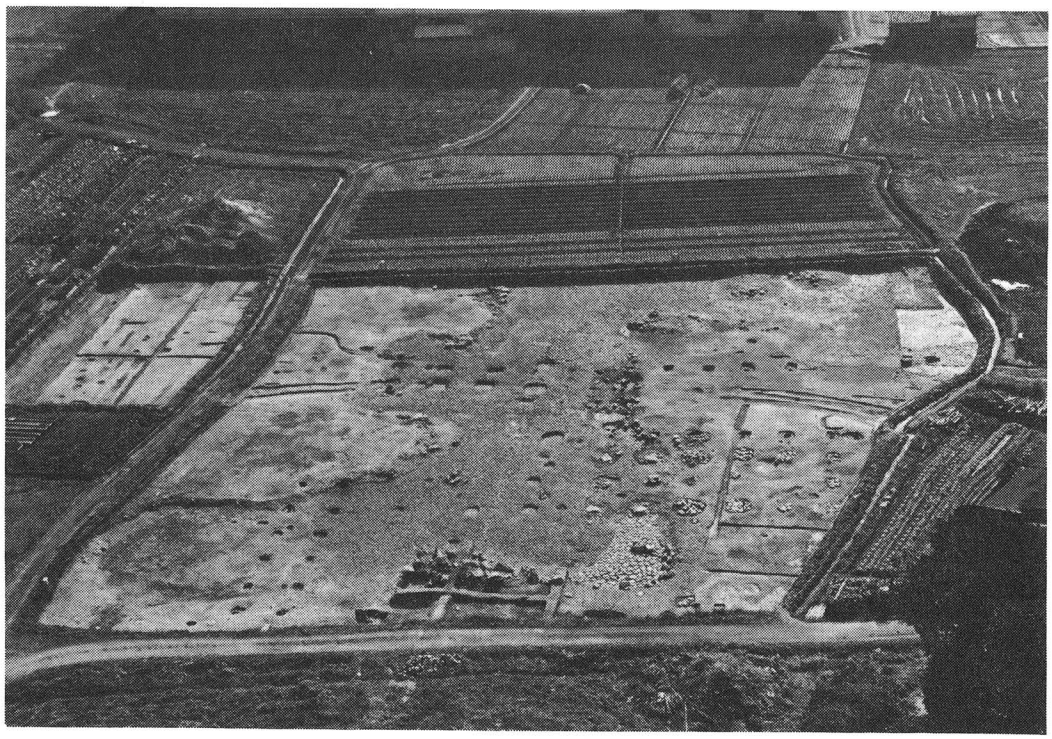
２　Ｂ期遺構

Ｂ期の遺構としては、園池ＳＧ５８００Ｂを中心に礎石建物１、柱囲い２、塀１、掘立柱建物１、桟敷１、渡廊１、橋１、溝１がある。すでにのべたように、Ｂ期は２小期に細分される。

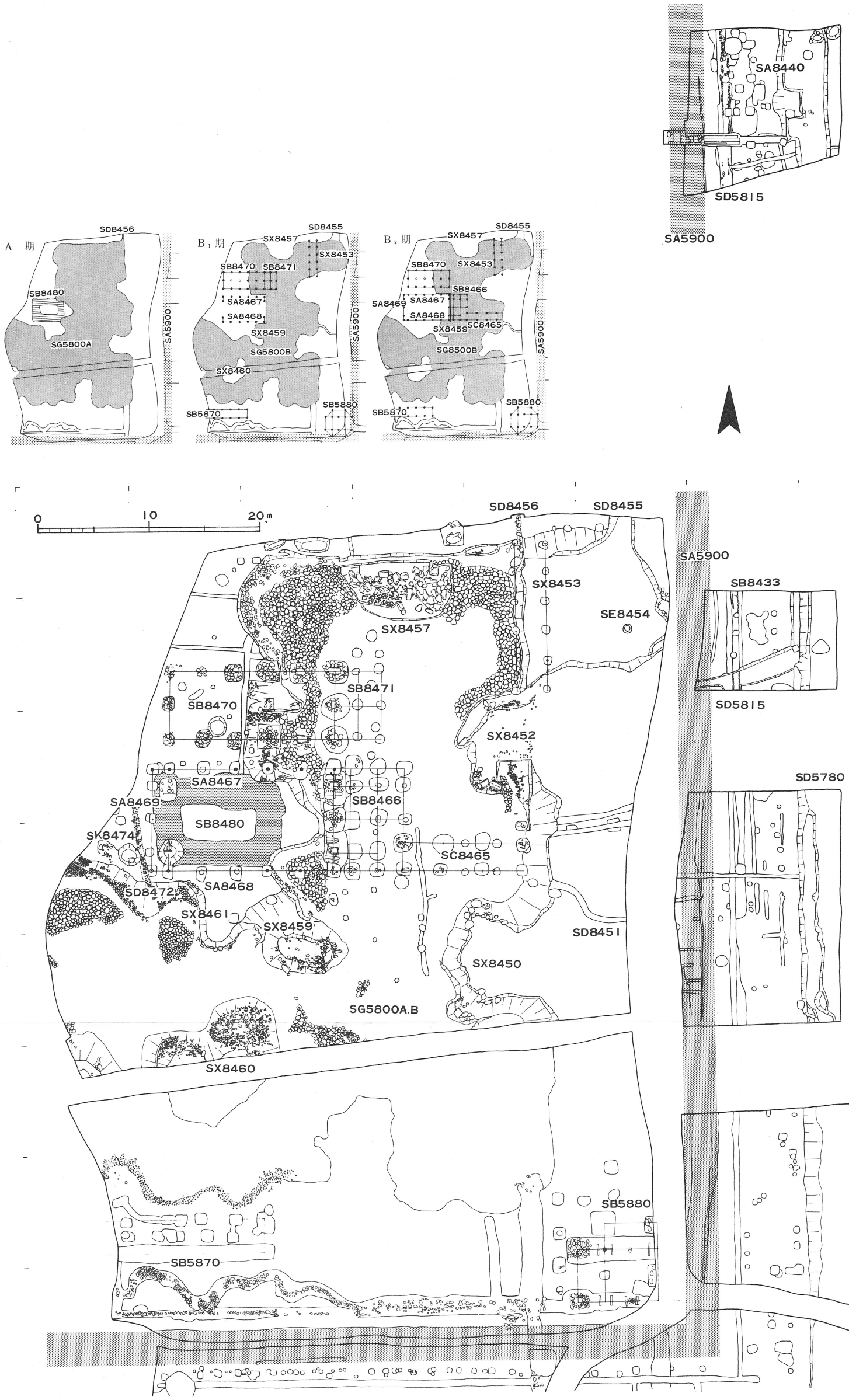
園池ＳＧ５８００Ｂは下層園池の上で全面的に改修した園池である。下層の石組や石敷などの施設を取りはずし、底から岸辺にかけて全面に暗灰色粘土を敷きつめ、そのうえに１０㎝内外の厚さで玉石を敷いている。池の概形は下層園池を踏襲するが、東北隅を東方にひろげてほぼ大垣の位置までのばしている。これは

給水路ＳＤ８４５５を東によせたためであろう。ここには曲物を埋込んだ湧水をとる設備がある（ＳＥ８４５４）。岬や入江の出入は深いが、池底を埋立てたため水深３０㎝内外の浅い池となる。東岸に岬２（ＳＸ８４５０、ＳＸ８４５２）が突出し、大きな縞状片麻岩や安山岩の石組痕跡がある。西岸屈曲部は半島状に突出し、先端に石組痕跡をとどめる（ＳＸ８４５９）。北岸中央部にほぼ原形をとどめる石組の築山がある（ＳＸ８４５７）。この石組は大きく、最大径１ｍ前後の安山岩や片麻岩の岩石を樹てならべている。第４４次調査で南半を確認している中島の北半部を発掘区の西南隅で検出した。やはり汀線に玉石をしき、片麻岩の石組痕跡がある。

礎石建物ＳＢ８４７０は園池の西岸にあり、東の部分を池中に没する東西棟礎石建物である。その規模は桁行５間（１５ｍ）、梁間２間（６ｍ）、柱間寸法はともに３ｍ（１０尺）等間である。柱位置の多くは根石によってくるが、池中に



第４図　園池SG5800 B（北から）



第５図　第99次調査遺構図

没する東妻柱などには三笠安山岩を用いた5個の礎石を残す。棟通りの東から2間分には小礎石と根石があり、床張りであったことがわかる。付近から桧皮や瓦が出土しており、桧皮葺で棟に瓦をのせた屋根を想定しうる。東妻から東西2間（3.6 m）、南北2間（6 m）の掘立柱がのびる。柱穴が小さくかつ浅いので、桟敷のごときものを付設したのであろうか（ＳＢ８４７１）。

柱囲いＳＡ８４６７・ＳＡ８４６８は礎石建物の前面に建つ。ＳＡ８４６７は北、ＳＡ８４６８は南にあり、ともに東西5間（１５ m）の掘立柱列。おのおのの東西両端柱の内寄り1.5 mの位置に大型掘立柱を建てる。柱根はすべて八角形である。一般には径２４ cm程度だが、四隅内寄柱は径５６ cmと大きく、横木を挿入した根がらみ痕跡がある（後述の建物ＳＢ８４６６の礎板として大型柱根が転用されていた。一方、建物ＳＢ８４６６から疑灰岩の八角柱根巻石や面取りのある板石が発見されており、柱囲内の地面が切石によって舗装されていたことが想定できる。大型柱の性格は明らかでないが、鳥居のごときものかもしれない。

以上の遺構がＢ期のなかでも古い時期（B_1期）に比定しうるものである。つぎにＢ期のなかでも後に改修された遺構（B_2期）についてのべよう。

塀ＳＡ８４６９は、柱囲いＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８のうち西方の大型柱を撤去したあと、西面の囲いを外へひろげたものである。すなわち、1.5 m西へのばした位置に、4間（1.5 m＋3 m＋3 m＋1.5 m）の掘立柱塀を増築する。

建物ＳＢ８４６６は柱囲いＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８の東の池中に浮ぶ。この遺構も東方の大型柱を撤去したのちにつくるが、構造がやや複雑である。すなわち、柱囲いの東端の柱を利用して南北4間（9 m）、東西3間（6.3 m）の総柱をたてる。この遺構が、床のみの桟敷様のものか屋根をもつのか明らかでないが、柱間隔が変則的なことや柱囲い広場の池中への拡張ということを考慮して前者を想定したい。南北の柱列を結ぶ西側の柱列にそって灌木を利用した杭（ＳＸ８４８６）があり、西岸の護岸がこのあたりにあったことを示す。西から2列目の柱列は西方のＳＡ８４６９と対称位置にあり、この柱列のみは高さを柱囲いに揃えている可能性がある。東側の柱列のうち、南の柱間が広いのは渡廊ＳＣ８４６５とつな

ぐためであろう。

渡廊ＳＣ８４６５は建物ＳＢ８４６６の東南隅と池の東岸を結ぶ、幅１間（2.4 m）で長さは３間（１0.8 m）である。

以上がB2期の遺構だが、池の東北隅で南北に架ける橋については時期を決めがたい。この橋は長さ６間（１3.5 m）、幅１間（３ m）の掘立柱の橋脚である。

3　遺　物

園池ＳＧ５８００Ａ・Ｂを中心に多量の土器、瓦類、木製品、自然木、種子などが出土した。とくに上層園池からの出土量が多い。

木　簡

礎石建物（ＳＢ８４７０）の東妻柱付近における上層園池の堆積土層から付札２点が出土した。それは布の給付に関するものか、「貞雄方一丈」、「忠安方二丈」とかく。同じく上層園池東北隅砂浜にある遺物堆積土中から、「第十五槽」とかく付札が出土している。

瓦　類

軒平瓦１００点、軒丸瓦９６点、鬼瓦２点、面戸瓦１点、緑釉平瓦２点、水波文塼１点、塼類などと多数の丸平瓦が出土した。

平城宮瓦Ⅰ期（和銅〜養老年間）の瓦は、軒丸瓦５点にとどまる。Ⅱ期（養老〜天平年間）の瓦としては軒丸瓦２４点（全体の３4.2％）、軒平瓦２３点（４4.0％）があり、出土量の大半を占める。それらのうち６２２５、６３０８、６６６３、６６８１型式が多数を占める。Ⅲ期（天平勝宝年間）の軒瓦は、軒丸瓦１９点と軒平瓦１３点とであり、６２８２、６１３３、６２９６、６７２１、６６９１、６６８９型式で構成している。Ⅳ期（天平宝字〜神護慶雲年間）の瓦には６７６０、６８０１型式などがあるが、少量である。

第６図　SB 8466 出土鬼瓦

鬼瓦のうち１点は建物ＳＢ８４６６の南側柱の礎板に転したもの。押熊瓦窯跡

出土の鬼瓦に類似し、Ⅱ期に属する。他の１点は礎石建物ＳＢ８４７０の東南隅柱付近から出土した。

下層園池の底（灰色砂面）からは６２２５、６６６３、６６６８型式が出土しており、すべてⅡ期に属する。上層園池のバラス敷からはⅡ期瓦とともに６２８２、６１３３、６２９６、６７２１、６６９１Ａ型式などⅢ期の瓦が出土した。上層園池の堆積土からは、Ⅱ・Ⅲ期瓦とともにⅤ期の６７６０、６８０１型式の瓦が出土した。

このような状況から、Ａ期の掘込地業建物（ＳＢ８４７１）には平城宮瓦Ⅱ期の瓦を葺いていたことが想定できる。Ｂ期の建物はⅡ、Ⅳ期の瓦を混用するが、Ⅲ期の瓦を主体としていたことがうかがえる。

土　器

土師器、須恵器、施釉陶器とともに、磁器や瓦器が出土した。

施釉陶器　上層園池の西岸の礎石建物付近の堆積土や整地土層から集中的に出土した。緑釉陶器としては香炉蓋、三足盤、皿など１０点がある。灰釉陶器は皿、杯、三足盤、瓶などの２０点である。いずれも平安時代初期の型式にぞくする。

黒色土器　量的に少ない。小型壷、三足盤、杯、皿、風字硯などが出土した。いずれも上層園池の堆積土からの出土で、施釉陶器と同時期である。

土師器、須恵器　上層園池の堆積土から多量の平城宮土器Ⅶ（８２５年頃）にぞくする土師器、須恵器が出土した。それらは東西の岸辺でかたまって発見された。なかに墨書するものがあり、判読できるものに「蔵人〔所カ〕□」、「宮」、「□道」、「…為嶋在……応□」、「土〔義カ〕□」、「…互…」などがある。

下層園池には小量ではあるが、平城宮土器Ⅲ（７５０年頃）の土師器・須恵器がともなっていた。

木製品

木製品や建築部材など２３８点が出土している。いずれも上層園池にともなうもの。

建築部材としては柱囲い（ＳＡ８４６７、ＳＡ８４６８）の大型柱の八角形柱、

根がらみ材、根太、楔などがある。上層園池の堆積土から出土した斗形の雛形は注目すべきもので、八角円堂の部材であり、第４４次調査で発見した八角円堂との関係が想定できる。また東岸の付近からは桧皮の出土が顕著であった。

木製品には挽物円盆、蓋、高杯、曲物、杓子、箆、箸、漆器蓋、布巻き軸、杵形、下駄、削り掛けなどがある。いずれも上層園池にともなう。

金属製品ほか

上層園池にともなって、鉄釘、鉄鎌、銅留金具、和銅開珎、神功開宝などが出土した。また、砥石や紡錘もあった。

植物遺体

上層園池の堆積土層には多くの種子や木葉があった。内容はマツ類の球果、モモ、クルミ、ウメ、ヒシ、アラカシ、センダン、アシ、ミクリなどの種子とアラカシの葉であった。ほかに水草も多い。

B　東面大垣地区(６ＡＬＦ－Ｅ・Ｄ・Ｈ)

園池地区の東側は、東面大垣に比定されている里道が一段高くのこり、外側に坊間路の幅をたどりうる約３０ｍ幅の水田が南北につらなる。外濠の推定線で史跡指定がなされているため、調査範囲は水田の半分に限られた。

１　遺　構

検出した主な遺構には、築地大垣、同東雨落溝、東面外濠、暗渠、塀、掘立柱建物などがある。

築地大垣ＳＡ５９００は、第４４次調査で確認した南端から、１１３.０ｍ北方まで調査したことになる。Ｅ区ではすでに削平されていたが、Ｈ区では基底部がよく保存されている。築地本体は道路敷のため幅員などを全体にわたって明らかにしえなかった。築地は後述する東雨落溝のあたりから掘込地業を行い、本体は版築でかためる。築地本体の幅は約３ｍである。

大垣東雨落溝ＳＤ５８１５は、築地の端から東へ約１.５ｍをへだてて南北にのびる。幅７０～１１０cm、深さ４０cm程度で、砂質土が堆積する。Ｈ・Ｄ区では両

側を丸平瓦で護岸している。

暗渠ＳＤ８４３６は、Ｈ区において築地下を流れて宮外の外濠ＳＤ５７８０に排水する暗渠である。暗渠は幅1.2ｍ、深さ５０㎝の掘形をおよそ東雨落溝を横断するあたりまで掘りこみ、そのなかにヒノキの板材で組上げる。現在蓋板をとどめないが築地本体にあたる部分は、凝灰岩切石で補強する。東雨落溝と外濠との間にある壗地の間は素掘りの開渠となる。なお、外濠が埋立てられたのちは、流路を南に変えている。

東面外濠ＳＤ５７８０は、東雨落溝から幅約５ｍの壗地をへだてて南流する大溝であり、二坊坊間路の西側溝でもある。溝の幅員は６ｍ内外、深さ６０㎝内外で、護岸の施設などはない。Ｅ・Ｄ区では細かい砂が主として堆積するが、Ｈ区では粘質土が堆積し多くの遺物を含んでいる。Ｈ区の南端の暗渠ＳＤ８４３６の流入する部分は一種の凹みを呈し、多量の木筒が出土した。木簡のなかに天平末年の年紀をとどめるものがあり、廃絶時の１点をしることができる。また、外濠の堆積はこの下にもあり、そこからは平城宮土器Ⅱが出土する。

Ｈ区の外濠は奈良時代の後期に埋立てられ、壗地から外濠の直上にかけて柱穴がある。

２　遺　物

遺物は主としてＨ地区から出土し、Ｅ・Ｄ地区からの出土量は少ない。

木　簡

１６５点の木簡と４１４点の同削片が出土した。それらはすべて外濠からの発見であり、なかでもＨ区の出土量が多い。その内容は、平城宮内の食料関係を扱う官司の文書類に集中しており、一括遺物としての性格をもつ。また天平１５、１８、１９、２０年の年紀がある。そうした木簡のなかに「東籠」と記するものがあり、園池地区を東籠に比定しうるかもしれない。

土　器

多量の土師器と須恵器のほか、小量の灰釉陶器、青磁、墨書土器がある。外濠の下層から平城宮土器Ⅱ（７３０年頃）が多量に出土しており、外濠の存続年代

をしることができる。墨書土器としては「宮」、「佐良　酒坏」と記すものがある。

施釉陶器としては、緑釉皿、灰釉皿が整地土から出土している。

瓦塼類

瓦類は、大垣に葺いたものとみられ、軒平瓦６９点、軒丸瓦９２点が出土した。主なものは平城宮瓦Ⅱ期の瓦で、６３０８、６２２５型式などの軒丸４０点（４3.5％）、軒平瓦３２点（４6.4％）である。Ⅲ期に属する６２８２、６１３３、６７２１型式は、軒丸瓦２１点、軒平瓦２９点である。Ⅳ期以降の瓦は少なく、６１３８、６７６０型式が各３点出土したにとどまる。こうした瓦の多くはＨ区の瓦溜ＳＫ８４４１から出土した。

木製品

外溝などから、糸わく、槽、曲物、杓子、砧状厚板、櫛、人形、木釘、漆塗皮製品、円座、むしろなどが出土した。

Ｃ　おわりに

先年からの第３９・４４次調査などによって、東院が奈良時代前年（天平初年）にはすでに造営されていることが明らかである。今回の調査でも、東面大垣の所用瓦、外濠下層出土の土器などの年代は、さきの推定と矛盾しない。もちろん、６ＡＬＦ−Ｈ地区の外濠にかぎれば、奈良時代の後半に埋められ小路からの導入を容易にしたことがうかがわれる。

大垣内に形成する園池遺構の造営年代を決める手掛りをえることはできなかったが、これに先行する奈良時代の遺構は存在せず、東院の成立当初から園池として計画されていた可能性がつよい。下層園池は破壊されている部分が多いが、ほぼ輪郭をたどることができる。岸辺に沿って扁平な石を敷きつめるなどの技法は、前年度に発掘した左京三条二坊六坪の北宮園池と類似しているが、その縁辺に玉石を竪にならべるなどの技法はみられない。北宮園池よりも作庭の時期が下るためであろう。この園池は西岸に建つ基壇建物から観賞するのであろうが、ここに至るまでの道路などの施設については今後の調査にまたなければならない。

上層園池への改修は出土遺物によって天平勝宝年間に想定しうる。この園池は、岸や底を玉石やバラスで敷きつめるため、下層園池とはかなり趣きをことにしている。石組の中心を北岸の中央におき、西岸につくる礎石建物、柱囲いなどが主殿になっている。さきに調査した東南隅にある八角円堂とは柱を八角形につくるなどの共通点があり、一貫した様式の建物で揃えていたことが推測される。その後、池中に桟敷状の舞台をつくり、渡廊をへて東岸にわたる施設が増置されるが、その基本構造は変化していない。

こうした上層池は、平安時代まで存続する。最終段階の遺物として施釉陶や木器の食器類が、主要殿舎であるＳＢ８４７０付近に集中し、一般の土師器や須恵器が東岸北部に集中していることは、利用状況をしる一つの手掛りとなる。

Ⅲ　佐紀池の調査（第101次）

第１０１次調査は佐紀池において行った。佐紀池は、平城宮の西北部にある東西１６０ｍ、南北１５０ｍの逆Ｌ字形を呈する池である。今般この池の北部にのこる民有地について、現状変更の申請があり、文化庁文化財保護部の指示にもとずき、その可否をきめるべきの事前の発掘調査を行った。

調査地区は６ＡＣＡ－Ｗ・Ｓ地区と６ＡＣＢ地区におよぶ。１９７７年１月７日から調査を開始し、３月２５日に終了した。

佐紀池は明治１７年にそれまで水田であった当地域の南側、つまり現在の一条通りの線上に築堤してつくる新しい池である。佐紀池の北方には御前池、下吉田池、上吉田池が連なり、平城宮造営以前には奈良山南麓の谷筋であったことが想定されている。第９２次調査では、一条通りの南側で、奈良時代の池の南岸および排水口を発見し、佐紀池一帯が奈良時代平城宮の園池である手掛りをえた。

今回の調査では、奈良時代の園池が佐紀池北端まで続いていること、および、その規模が現在の佐紀池とほぼ等しいことが明らかとなった。また、堰をもった古墳時代の溝も検出され、当地域の古墳時代を知る上で成果があったが、とりわけ、従来この地域では未発見であった縄文式土器を検出したことも看過しえない成果であった。

１　遺　構

佐紀池北端部の池底およびこれに東接する水田に南北幅１５ｍ、東西長６７ｍの東西トレンチを設定し、さらに、東西トレンチの東南約３０ｍの地点の池底に旧園池汀線と思われる段差があるため、ここに東西幅６ｍ、南北長２６ｍの南北トレンチを設定した。

東西トレンチでは、浅い所で現地表下１０cm、深い所で現地表下約２ｍに遺構面があり、この面で奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝と土壙を検出した。

南北トレンチでは、北から南へゆるやかに傾斜する現地表下約４０cmに遺構面があり、奈良時代の園池と溝、古墳時代の溝を検出した。

a　奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、園池ＳＧ８５００、溝ＳＤ８５０１、溝ＳＤ８５０２がある。

園池８５００は、東西トレンチで東西両岸を、南北トレンチで北岸を検出した。西岸は直線的で真南北に走る。東岸は西岸に比べて曲折があるが、大勢として北で西へ約４５度ふれる角度で走っている。そのため、園池の東西幅はトレンチ北壁で４３ｍ、トレンチ南壁で５５ｍと、北で狭く南で広がっている。北岸は、東岸が南へのびて東折する延長線上にあり、東西に走っている。

岸はいずれも傾斜角約１０度のきわめてゆるやかなもので、斜面にはこぶし大の小礫を敷きつめている。敷石がもっとも良く残っている東岸の場合には、粘土質の斜面ベースに幅約２ｍで礫がしきつめられていた。西岸と北岸の場合には敷石の残りが悪く、とくに西岸では痕跡程度に小礫が点在する程度であったが、当初は東岸と同様に密に敷石があったものと考えられる。また、東岸では敷石の東側の岸上に大小の自然石が点々と配されており、これによって多少とも園池としての景観を整えていたものであろう。北岸北の岸上には直径１０～３０㎝の不整形の石抜穴が密に接する部分があり、ここでは石を並べていた可能性が強い。

東西両岸にはさまれた池底は、南北方向では若干南へ下るに対し、東西方向ではほとんど水平である。池底には厚さ１㎝以下の薄い砂の堆積層があり、砂層の上に厚さ約５０㎝の植物腐食層がある。植物腐食層から、奈良時代から平安時代初期に至る土器類とともに、瓦塼類、木製品、木簡、金属器、貨幣が出土した。

溝ＳＤ８５０１は東西トレンチ中央部の池底を南北に走る素掘りの溝である。幅約４０㎝、深さ約２０㎝の断面Ｕ字形の小さな溝で，溝中から木簡と須恵器が出土した。

溝ＳＤ８５０２は南北トレンチ中央部を東西に走る幅約５０㎝、深さ１０㎝の浅い素掘りの溝で、溝中から土師器と須恵器が出土した。溝ＳＤ８５０２の埋土のの上には灰白色の砂層が広がっており、この砂層から炭や焼けた木片多数とともに土師器、須恵器が出土した。この部分は園池池底にあたり、渇水時にここで火

を焚いたことがあったようである。

b　奈良時代以前の遺構

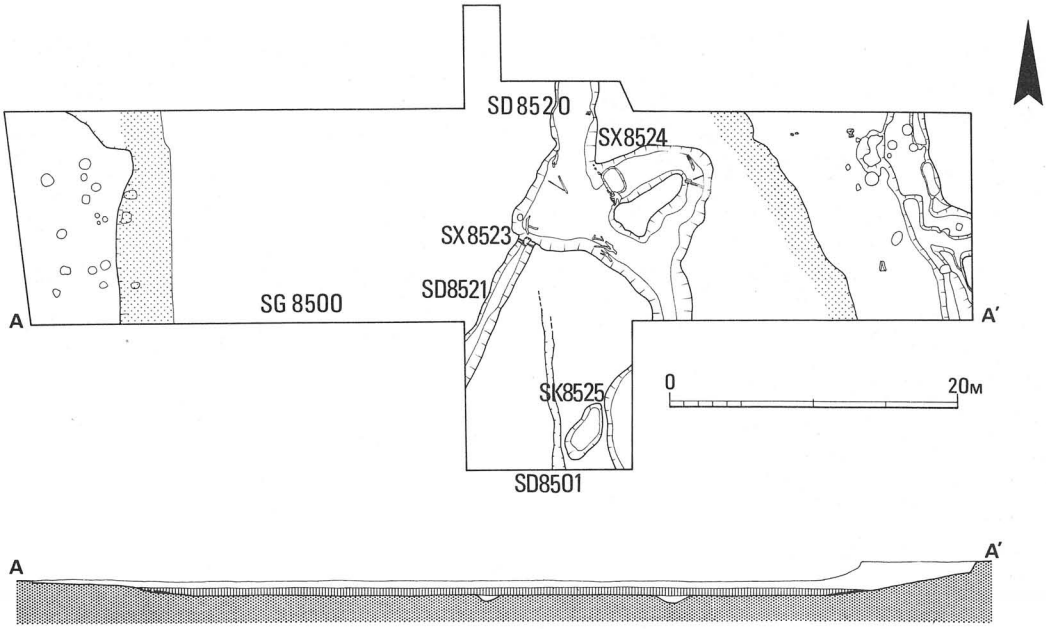
奈良時代以前の遺構には、溝ＳＤ８５２０、ＳＤ８５２１、ＳＤ８５２６、ＳＤ８５２７、ＳＤ８５２３、堰ＳＸ８５２３、ＳＸ８５２４、土壙ＳＫ８５２５がある。これらの遺構はすべて園池ＳＧ８５００の池底面で検出された。なお、ＳＤ８５１９は近世の溝である。

溝ＳＤ８５２０は、東西トレンチ中央部を北から南へ蛇行しながら流れる、幅約３ｍ、深さ約６０cmの溝で、途中で２つに分流したのち、また合流する。分流の始点に堰ＳＸ８５２４がある。溝には茶色の有機物腐食層、灰白色の砂層、黒色の粘土層が互層となって堆積しており、各層から土器、木器、金属器、植物の果実と葉、昆虫遺体が出土した。出土した土器類のほとんどは布留式の土師器で、庄内式の土師器、後期弥生式土器を少量含んでいる。ただ、溝最下層から布留式の土師器が出土し、整然とした時期的堆積層序を示してはいない。

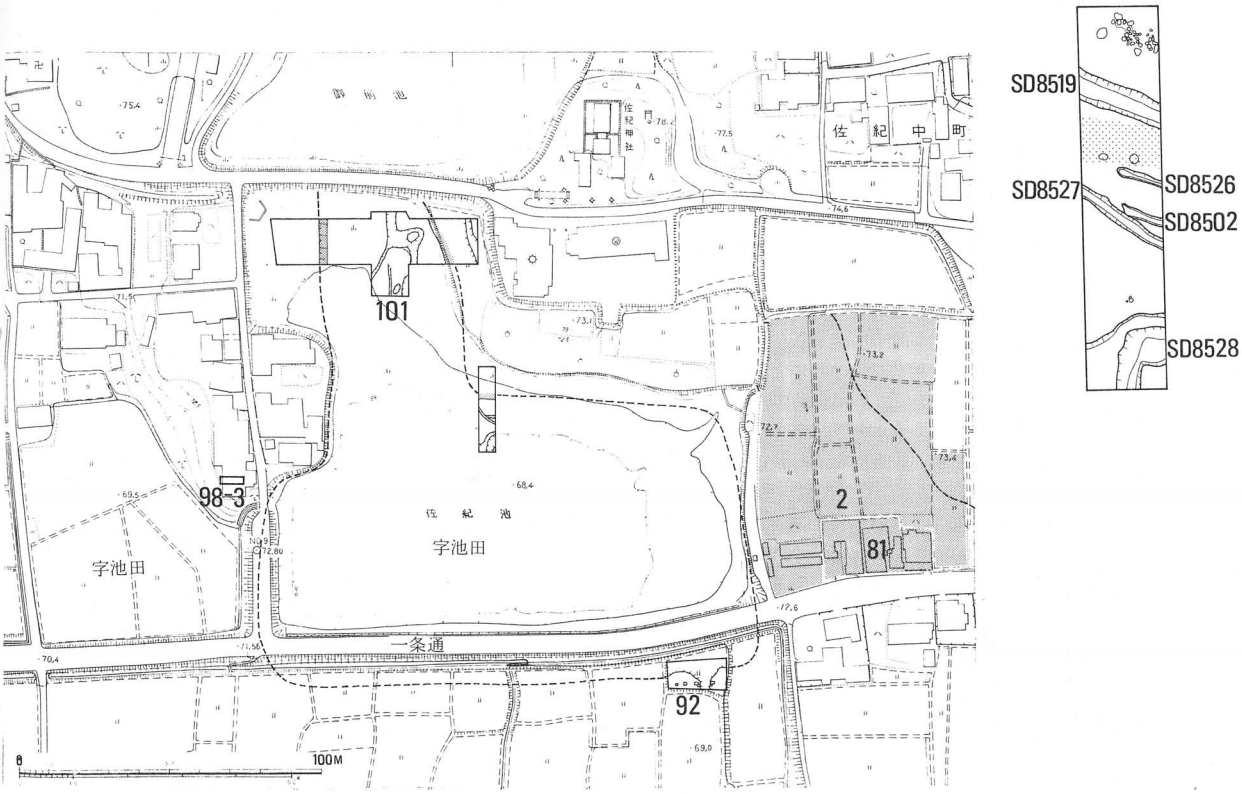
堰ＳＸ８５２４は、溝ＳＤ８５２０の分流の始点に設けられた堰である。幅３ｍの分流の川幅いっぱいに矢板を南北一列に打ち込み、南端では大きな自然木の根を矢板で打ちつけて固定し、堰の部材として利用している。矢板は幅１０～１５ｍ、厚さ約５cmの榊の板材で、先端を尖している。

溝ＳＤ８５２１は、蛇行する溝ＳＤ８５２０の西南岸にとりつく幅1.5ｍ、深さ５０cmのＶ字形に近い断面をした溝で、西南から北東へ直線的に流れてＳＤ８５２０に合流する。溝には上下２層の堆積があり、下層は小石を含んだ灰黒色の砂層、上層は黒色の粘土と有機物の混った層である。上層から布留式の土師器が出土した。

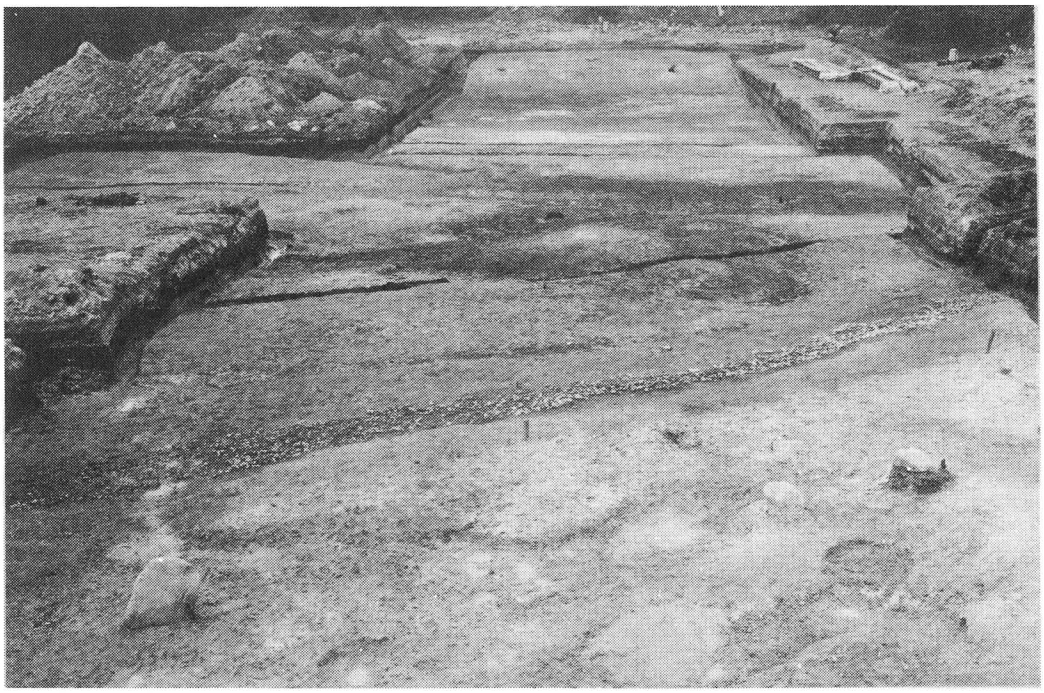
堰ＳＸ８５２３は、ＳＤ８５２１がＳＤ８５２０にとりつく地点から南約４０cmに作られた堰である。溝幅いっぱいに直径約６cmの丸太を一列に打ち込んだもので、丸太の先端は尖っている。ＳＸ８５２３の北３０cmの地点にはこれと平行する堰があったらしく、直径５～６cmの円形のピットが一列に並んでいる。ＳＸ８５２３の前身の堰であろう。



第６図　第101次調査遺構図



第７図　第101次調査位置図



第８図　第101次調査遺構、上は奈良時代池の汀線、下は古墳時代木器の出土状況

溝ＳＤ８５２６とＳＤ８５２７は南北トレンチで検出した素掘りの東西溝である。遺物は出土しなかったが、層位的には奈良時代以前のものである。

土壙ＳＫ８５２５は、東西トレンチ南端で溝ＳＤ８５２０の西に接する楕円形の土壙である。短径1.7ｍ、長径３ｍ、深さ６０㎝で、有機物を含む黒色の粘土が堆積していた。遺物はないが、古墳時代ないし弥生時代のものと考えられる。

Ⅱ 遺　物

今回の調査では、縄文式土器から近世に至るまでの各種の遺物を得たが、ここでは園池ＳＧ８５００と古墳時代溝ＳＤ８５２０出土の遺物、縄文式土器を中心に報告する。

a　ＳＧ８５００出土の遺物

1　瓦塼類

ＳＧ８５００堆積層から、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼などの瓦塼類が少量出土した。このうち軒丸瓦は、６２８２型式１点、６２２５型式１点、６３１４型式２点、６１３４－Ｂ型式１点、型式不明４点の計９点である。軒平瓦は、６６６３－Ｃ型式１点、６６８２型式１点、６６４２型式１点、６７７９型式１点の計４点である。

土器類

ＳＧ８５００から土師器、須恵器が出土した。出土量も少なく、また大部分が小破片であるが、年代のわかる最も古いものには神亀年間頃と推定される須恵器蓋Ａがあり、最も時期の下るものには９世紀中頃の土師器杯Ａがある。

墨書土器でほぼ完形に近いものが１点ある。天平末年頃に編年できる土師器皿AIで、底部外面中央に「天平十八年」の紀年があり、内面には土器の器名と数量を記している。辛櫃に納めた容器の品目と数量を記したものであろう。

墨書土器釈文

	高佐良九	二
	佐良八	佐良卌
〔櫃カ〕	毛比卌	毛比卅
（内面）・二辛二	鋺形卌	片真利廿
	□都支二二	鞄五柄
	土高佐良一	

（外面）・天平十八年潤九月廿七日□□□

木簡

木簡は２点ある。１点は習書風のもので、多数文字があるうち、「小」のみが判読できる。もう１点は文様風のもので、直線数本どうしを斜格子風に組み合わせたものである。

木製品

木製品には、下駄２点、刳物破片２点、甑底板２枚、曲物底板５点、削り掛け２点などがある。他に中世に下ると思われる外面に朱文をもった黒漆椀が１点、ＳＧ８５００から上の層から出土している。

金属製品

金属製品には鉄鎌１点があり、貨幣では神功開宝が１点出土している。

ｂ　ＳＤ８５２０出土の遺物

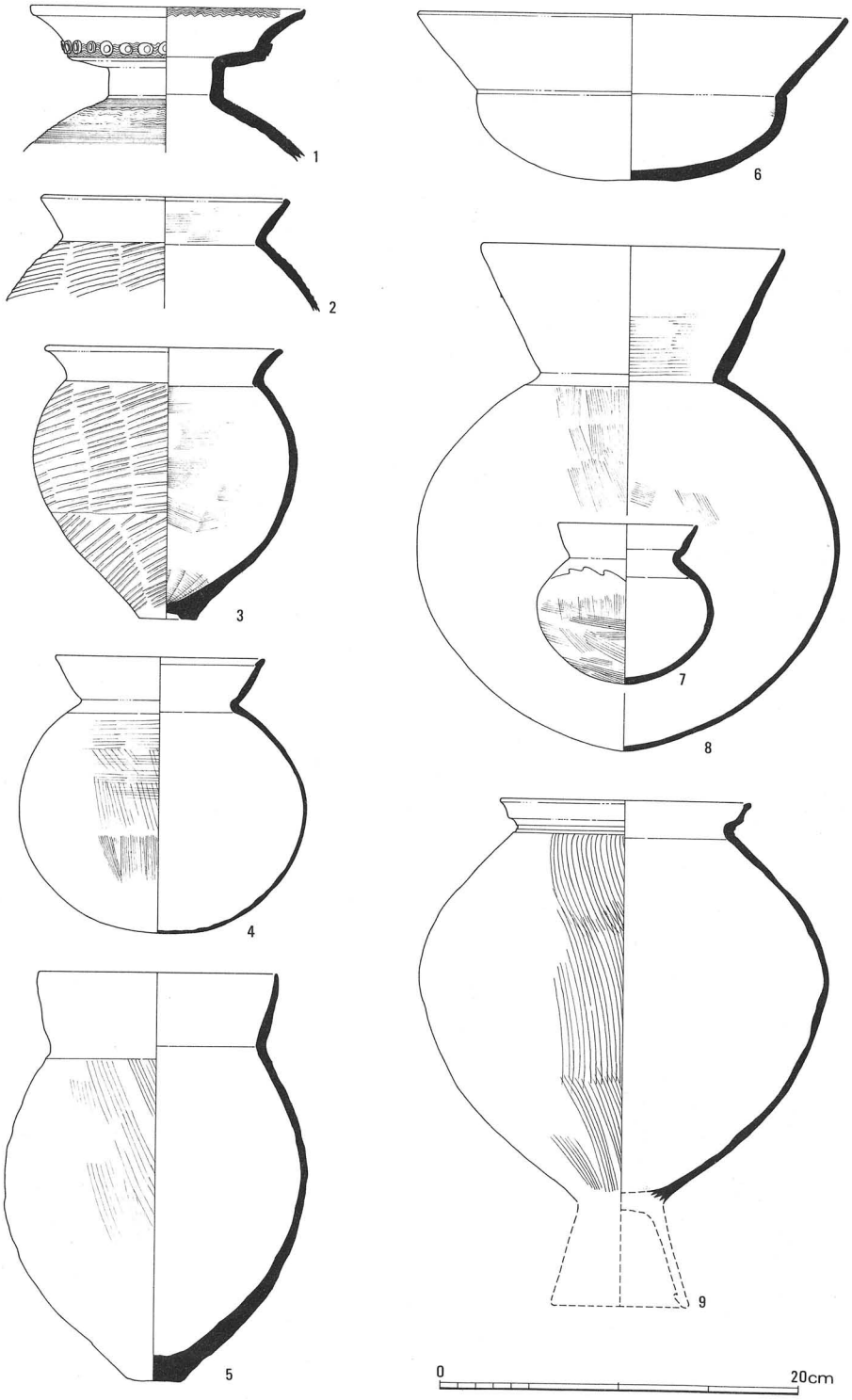
土器類

ＳＤ８５２０出土の土器のほとんどは布留式に属する土師器で、甕、壷、小形丸底壷、高杯、鉢があり、甕の中にはいわゆるＳ字状口縁をもつものが少数ある。他に庄内式に属する土師器甕・壷、後期弥生式土器の甕が少数ある。

木製品

木製品には鋤、きぬた、ちきり、梯子、台板状木製品があり、他に建築部材と推定される板状品もある。また、木製品ではないが、瓢箪も１点出土している。

鋤にはスコップ形の柄身共づくりのものと、なすび形の着柄鋤とがある。前者にはほぼ完形に近いもの２点、身の先端部破片２点があり、後者には完形品１点、破片１点がある。なすび形の鋤は長さ８５㎝の長大なもので、形式的には庄内式の時期に属すると推定される。きぬたは２点とも柄の先端にもどりのある形式である。ちきりは２点、梯子は１点でともに破片である。台板状木製品は平らな板の下面に断面台形の太く短い脚を２本、下駄の歯状に削り出したものである。以上がＳＤ８５２０出土の木製品だが、完形品の多いこと、未成品のないことが特徴的である。



第９図　第 101 次調査出土古墳時代土師器

ＳＤ８５２０南岸の斜面から、小形の素文鏡が１点出土した。直径2.8㎝、厚さ0.5㎜の薄手、小形のもので、鏡背に鈕がつく。白銅色を呈し、錆もない。Ｘ線放射化分折では、錫に比して鉛が多いことが知られ、成分的には日本製の三角縁神獣鏡と近いことが指摘できる。

縄文式土器

東西トレンチで、土層観察のためにＳＧ８５００の池底を部分的に掘り下げた時に、出土した。ＳＧ８５００のベースは灰白色の粘土で、粘土の下は砂とバラスが堆積しており、このバラス層から出土したものである。

総数１２点で、いずれも小片であり、器面の荒れが激しいが、器種のわかるものに鉢形土器があり、総じて縄文時代中期に属するものである。

Ⅲ まとめ

今回の調査によって佐紀池北端部に奈良時代の園池があったことが明らかとなったが、調査面積が少ないこともあって、今回の調査結果だけからは園池の全体的規模は知り難い。しかし、佐紀池の東の水田地域については、第２次調査、第８１次調査が行なわれ、佐紀池の南側では第９２次調査がある。こうした発掘調査以外にも、平城宮造営以前の旧地形の研究もなされており、明治１４年の地籍図や現在に残る遺存地割などを含めて、園池の規模をかんがえてみたい。

a　平城宮造営以前の当地域は、北から南へのびる奈良山丘陵の谷筋にあたる。第２次調査において、佐紀池東岸までの地域が埋立てられていることが明かにされている。推定第一次内裏地域の調査の進展にともない、和銅当初にはこの地域が形成されており、池形もこのころに整ったとみなければならない。

園池の南岸は、部分的だが第９２次調査で検出した。ただし、提を築き水門を設けるのは天平末年頃に比定された。今回の所見からすればもう少し時期が繰上る可能性がある。

西岸南部では、第９８－３次調査がある。その位置は半島状に突出した先端部にあたり、盛土ではなく丘陵の地山であることを確かめた。このあたりは、池底面から３ｍ程度高くなっている。明治１４年の地籍図では現在の佐紀池一帯および

道路を隔てた西側の水田がともに「池田」の小字名をもち、両者とも園池内であった可能性を示す。このように考えると両者にはさまれた小台地は半島形となる。

園池の規模についてのべたが、ほぼ現状の池形が奈良時代に存在したことはまちがいない。園池北端の東西幅と現状の御前池南岸幅および高低については段差があり、両者の連結点には堰ないしは築提を予想せざるをえない。

b　つぎに園池ＳＧ８５１０の造営時期にふれよう。園池東岸の盛土造成は第２次調査によって和銅当初とされ、第９２次調査の結果と矛盾しない。南面に築堤して整備する時期について第９２次調査では天平末年に比定した。しかし今回敷石をおおう植物腐食層から「天平十八年」の墨書土器が出土するとともに、神亀年間の須恵器も発見されているので、天平末年よりも古い時期に護岸がなされていたことは確実である。この地域が和銅創建の推定第一次内裏築地回廊の西に位置していることからも、同様にかんがえられる。その後、園池は奈良時代を通じて存続し、平城上皇の後もしばらくは池としての生命を維持しているとかんがえてよかろう。

c　東院の園池ＳＧ５８００や左京三条二坊六坪の園池ＳＧ１５０４と比較すれば、規模が雄大であり、自然地形を巧みに利用している点に大きな相違点があり、その性格も自から異なるもとと推察される。

『続日本紀』天平１０年の条に「秋七月癸酉。天皇大蔵省に御し相模を覧す。晩頭に転じて西池宮に御す」とある。「西の池の宮」についての記事はこれが唯一であり、詳しくわからない。平城宮の西辺については、第１４次調査以降かなり調査したが、園池に見合う遺構はない。園池ＳＧ８５００は宮の西北にあり、位置的に合致する。以上のようなことから、今回検出した園池は「西池宮」である可能性が高い。

Ⅳ　薬師寺西塔の調査

薬師寺の依頼をうけ、１９７６年7月5日から１９７６年8月２５日まで、西塔基壇および周辺の発掘調査を行った。

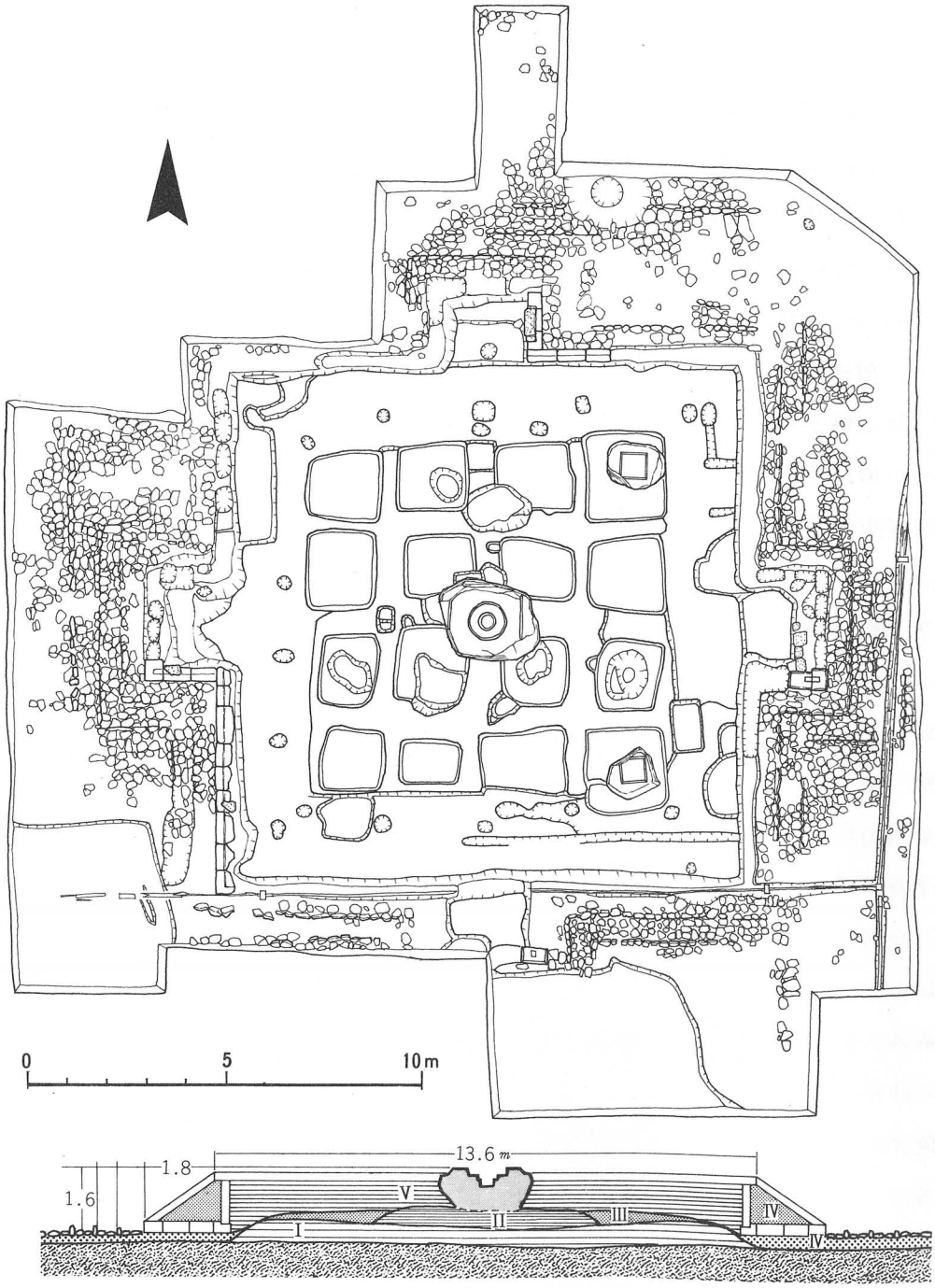
西塔跡については過去２回の調査が行われている。第１回は文殊堂の解体撤去された１９３４年に、足立康氏によってなされ、塑像片・和同開珎・勾玉等をえている。第２回は１９６９年で、杉山信三氏等によって西面階段が発掘された。

1　遺　構

基壇は一辺約１３.６ *m* の正方形で、復原高は1.4 *m* となる。四面の中央に幅３ *m* の階段がとりつき、基壇から1.8 *m* 出ている。現存基壇の上面から約７０ *cm* 下までには、焼失時の焼土を含む撹乱土が堆積していた。これを除去して、砂土と粘土の互層で積み固める基壇積土を検出した。残存する３個の礎石のうち、心礎は原位置にあるが、他は移動している。基壇上面では四天柱と母屋柱の礎石を据えつけた掘形を１６個検出した。掘形は一辺約1.5 *m* の方形であるが、すでに根石等の据えつけ痕跡は検出できなかった。裳層の礎石掘形については四天柱、母屋柱の掘形にくらべて浅いためか、すでに削平されていた。なお、心礎には掘形がないので、心礎のみは基壇築成前に据えつけていたとみられる。

基壇の築成は掘込み地業を行わず、旧地表面から土を積上げている。築成工程は大まかに４段階に分かれる。第１段階は旧地表に瓦やバラスを敷きつめたのち、粘土とバラス土を互層に比較的細かくつき固める。第２段階は心礎の部分のみに細かい版築を行い、この段階で心礎を据えつける。第３段階は基壇上面まで大まかに版築し、四天柱等の礎石位置に掘形を掘込み、礎石を据える。第４段階は各辺の階段部分に土を積み、基壇化粧を行う。

基壇周囲の地覆石はほとんど抜きとられていたが、西面南半部と北面の一部に当初の形で残っていた。石質は花崗石で羽目石をのせる部分は一段低く細工し、基壇内にかくれる部分は自然面をのこす。地覆石の上に立つ羽目石は完全な形をとどめないが、痕跡によって幅６０ *cm*、厚さ２０ *cm* の切石であることがわかる。



第10図　薬師寺西塔遺構図

羽目石を立てただけで束石をともなわない古い形式で、先年の発掘調査で確認した金堂基壇の場合と同じである。

基壇の外周は一面の石敷とする。地覆石の外側を６０㎝幅で犬走りがめぐり、その外周に扁平な石を立てて側石とする雨落溝を設ける。また、基壇端から3.5ｍの位置には、一列にならべた立石（見切り）が方形にめぐる。この立石列は一辺２０.６ｍの正方形をなし、西塔域を画する施設と考えられる。敷石はさらに外方に向ってのび、あるいは回廊内の全域に敷きつめられていたのかもしれない。なお、創建時の石敷面は享禄の焼失時（1528年）にはすでに埋もれていたらしく石敷と焼土面との間には灰黄褐色砂土の自然堆積が介在している。

他の検出遺構としては、発掘区南端にやや時代の降るとみられる池の汀線と、発掘区東辺と基壇南辺にそって、石敷や基壇をこわしてつくる近世の竹筒の上水施設がある。

2　遺　物

今回出土した遺物は、莫大な量の瓦類のほか、塑像、銭貨、金具、土師器（灯明皿）などがある。

塑　像

東西両塔には釈迦八相の群像が安置されていた。八相のうち入胎・受生・受楽・苦行の因相が東塔に、成道・転法輪・涅槃・分舎利の果相が西塔に配置されていた。今回出土した塑像片には頭部、手、胴部、足、袈裟、甲などがあり、なかには如来像、菩薩像と判定しうるものもある。また、彩色や金箔が残っているものもある。胎土は雲母の多い緻密な粘土を用いている。この他、塑像の胎土とは異なる砂粒を多く含んだ破片がある。直線や曲線の凹凸に富む文様があり、白土で彩色されている。これらは諸相の背景となった山岳や巌洞、台座を現わした一部であろう。

瓦　類

軒瓦約８００点と丸・平瓦が焼土混り褐色土層から出土した。軒瓦は焼失時に近い室町・鎌倉時代のものが多く、本薬師寺式や奈良時代のものは一割にもみた

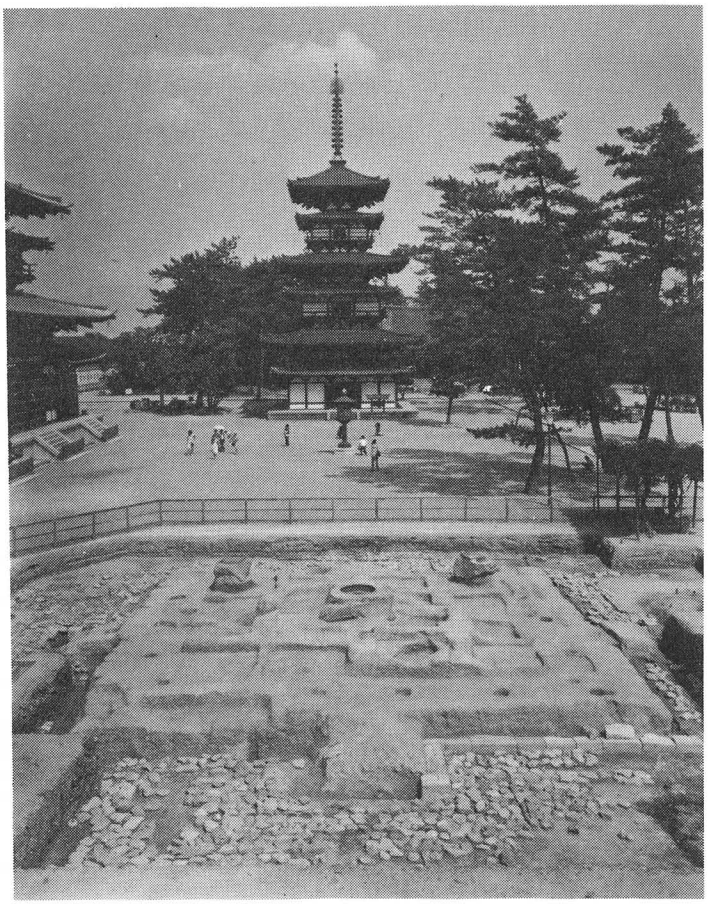
ない。焼失する頃までに、創建時の瓦はほとんど葺替えられていたのであろう。

金属製品

棰先飾り金具、厚板、塑像芯銅線、鋲、帯状留め金具などの青銅器が出土した。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり、相輪の一部とも考えられる。銭貨には和銅開珎2枚のほか、淳祐元宝、祥符元宝、景徳元宝、寛永通宝などがある。ほかに釘、カスガイ、座金具などの鉄製品が多い。

土　器

土器類はきわめて少量であり、焼土層と灰黄褐色砂土から須恵器の小片と灯明皿が若干出土したにすぎない。



第11図　薬師寺西塔基壇（西から）

V　法華寺周辺の小規模調査

本年度も法華寺旧境内およびその周辺で数次にわたる小規模な発掘調査を行った。それらは建物の増改築などを契機に発掘したもので、面積は少ない。ここではその主なものを選んで報告しておく。

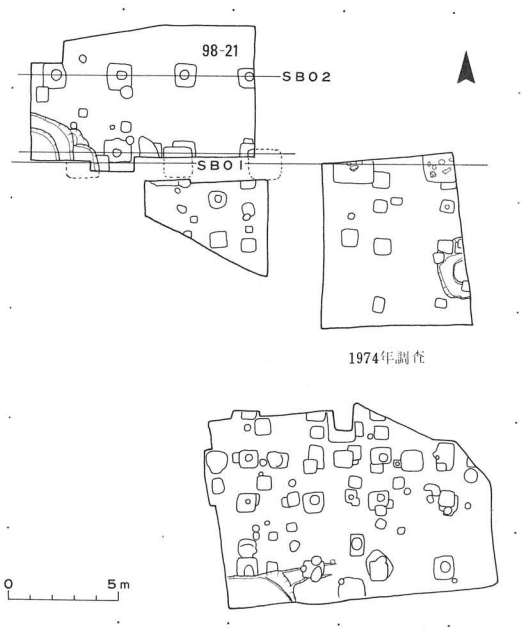
金堂周辺の発掘１（第９８－４）　６月には先年、遺構の一部を検出した金堂の東南部で調査した。建物改築予定地で、東西３ｍ、南北５ｍのトレンチを設定した。土層は上から黒灰色土、黄褐色砂質土、暗灰褐色粘質土、淡褐色粘質土（地山）であり、第３層で遺構を検出した。柱穴や土壙のうち、柱穴は各１間ずつで時期を異にする３棟分であるが、小面積のため、性格を明らかにしえなかった。

金堂周辺の発掘２（第９８－２１）　２月から３月にかけては、金堂の一部とおもわれる遺構を検出した。当調査区の東南に接した地域において１９７４年に発掘が行われ、創建の法華寺金堂と推定される建物ＳＢ０１の南側１間分のほか、４期以上にわたって重複する建物遺構を検出している。

今回の調査地区は法華寺の南北中軸線上にあり、前回検出した推定金堂南側柱の西延長部と、入側柱の検出が予想された。

遺構の検出は２０cm～４０cmの肥土層を取除いて、黄褐色粘質土地山層の遺構面で行なう。発掘区西南部は他より３０cm高く遺存していたが、これは旧水田面の段差を示している。

検出した遺構は建物２棟ＳＢ０１、ＳＢ０２と中世の井戸状遺構



第12図　第98－21次調査遺構図

および小柱穴８である。ＳＢ０１は発掘区南端に検出した東西２間分の掘立柱列で、前回調査した金堂南側柱に続く。柱間１４尺で、前回と合せて４間分を確認した。しかし、当初予想した入側柱は痕跡を残していない。現本堂下とその東に検出した建物遺構では礎石と掘立柱を混用していることから考えると、当建物の入側柱は礎石建であった可能性も充分ある。

ＳＢ０２は東西３間１０尺等間、南北１間１２尺間で、南側の柱はＳＢ０１と重複して、これより新しい。西南隅の柱穴は井戸によって破壊されている。この建物は桁行３間以上の東西棟建物の南廂と推定される。

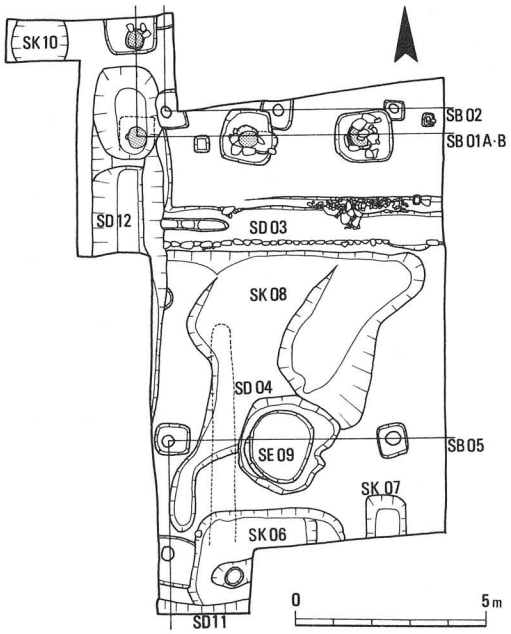
井戸は発掘区西南隅で検出された直径４ｍ以上と推定される円形掘形の一部で、埋土は鎌倉期の瓦片が多量に混入していた。その形状から井戸と推定される。

今回の調査の結果、創建金堂は入側柱の痕跡を残さない点で、今後の調査の進展にまたねばならないが、一応、身舎を礎石建と考えると、現本堂下の建物跡を含めて、創建法華寺の建築構造、手法に注目すべき点が多い。また、今回検出した金堂南側柱の東柱間は、ちょうど、現伽藍中軸線上にあり、伽藍中軸線は創建以来かわらないものと推定される。

経楼推定地の調査（第98－17）

この調査は、法華寺境内での収蔵庫建設計画にもとづく現状変更事前発掘調査である。当該地は、境内西南地域で畑地となっている。

法華寺の伽藍配置については、過去に幾度か行われた調査の積み重ねにより、また地形から推定される東西両塔の位置や中門の位置等により、おおむねその状況が把握されている。とくに、昭和２７年から行われた現本堂の解体修理



第13図　第98－17次調査遺構図

工事における地下調査によって、現本堂が原位置にあることが確認され、本堂の中軸線がほぼ伽藍中軸線となることが明らかにされている。さらに、昭和２７年には現鐘楼の位置で凝灰岩基礎地形が検出されており、これは造営当初の鐘楼基礎であろうと推定されている。本堂中軸線と鐘楼中軸線との距離は、約３７ｍあり、この距離を折り返した位置が今回の調査地区にあたり、ここに経楼跡の存在が予想された。

調査はまず３ｍ幅の南北トレンチを設定して、遺構の残存状況を把握することから始めた。過去に畑地にされた際、かなりの土盛りが行われており、厚いところでは約０.９ｍあって、黄褐色バラス土、黒褐色粘質土等が互層に盛られていた。遺構検出面はおおむね黄褐色バラス混り粘質土であり、これはこの地域での地山である。

その結果、経楼推定地は後に削平を受けていることが判明し、わずかに北側雨落溝の推定位置に野面石組みの東西溝を検出した。しかし、その北側に根石を残す掘形の一部を検出したため、この石組溝が果して経楼に伴うものであるのか否かということも明確でなくなった。そのため、発掘区を拡張して遺構の性格をより明確に把握することに努めた。

こうした調査の結果、掘立柱建物３、溝３、土壙２、井戸１を検出した。

建物ＳＢ０１Ａは掘立柱建物であり、柱穴４個を検出した。いずれも１辺１ｍをこえる大きな掘形であり、すべてに柱根が残っていた。柱根は直径６０～７０㎝の太さをもち、面取りが施された痕跡も認められるが、規格的になされたものであるのかは明確でない。柱根の下には、柱を安定させるために瓦片が詰められており、軒丸瓦６２８５Ａ、軒平瓦６６６７Ａが混在していた。このＳＢ０１Ａの柱間寸法は、東西方向３ｍ、南北方向２.７ｍであり、東西棟と推定される。このＳＢ０１Ａの柱は、後に根本で切断され、礎石立ち建物に改造された（ＳＢ０１Ｂ）ことが残存した根石によって明らかである。建物ＳＢ０２は東西方向の柱間寸法３ｍの掘立柱建物である。南北方向は西側柱筋で南から２個めの掘形をごく一部検出したのみであるため明らかでない。建物ＳＢ０５は東西・南北とも柱

間寸法３ｍの掘立柱建物である。ＳＢ０２・０５とも柱根は残っていない。

溝ＳＢ０３は野面石を両岸に用いた東西方向の溝である。南岸の石は護岸施設であるが、北岸に見られる数個の石は護岸施設そのものではないようである。この北岸は約４０cm幅で１段掘り下げられており、ここに多量の瓦片をともなっている。こうした状況は、北岸施設の裏込めとして用いられたものであり、ここにみられる石は地覆下の延石と考えられよう。したがって、溝ＳＤ０３は建物ＳＢ０１Ａを建物ＳＢ０１Ｂに改造した時点で基壇が築かれ、その際に設けられた雨落溝とかんがえるのが適当だろう。

溝ＳＤ０３の南側は浅く土壙状に削平されており（ＳＫ０８）、多量の土器片が出土した。この地域は中世以降、近世に至るまで幾度となく掘削、整地がくり返されており、溝（ＳＤ０４・１１・１２）、土壙（ＳＫ０７・１０）、井戸（ＳＥ０９）等が随所に見られる。

溝ＳＤ１２は幅約２ｍの南北溝である。この地域から南流する溝であるが、ＳＢ０１の西南隅にかけて掘り始められたものが、柱根にかかったためか、西南隅の柱根をはずれて再び掘り始めている。出土遺物から中世以降の掘削であることが明らかである。ＳＥ０９は直径３ｍちかい掘形をもつ井戸である。井戸枠は見られず素掘りであり、近世のものである。

遺構の検出状況は以上のごとくである。当初予想した位置には経楼跡がみられず、掘立柱建物ＳＢ０５の一部を検出したのみである。建物ＳＢ０１Ａは、柱根の下から出土した瓦片のうち軒瓦が天平初年を降るものでなく、この造営が８世紀の前半に行われたことを想定させる。また、南雨落溝の護岸石の裏込め土から８世紀後半の土器が出土している。おそらく掘立柱建物から礎石立ち建物への改造は、法華寺造営に伴ってのことであったろう。

法華寺境内においては現本堂地下、本堂南・本堂東で検出した３棟が掘立柱を礎石立ちに改造したものであることが確認されている。これらは、すべての柱を一時に礎石立ちに改めるのではなく、南北側柱の中央部数間を掘立柱のままにしての改造である。したがって、今回検出した建物ＳＢ０１Ａ・Ｂも同様な造作で

ある可能性が認められる。

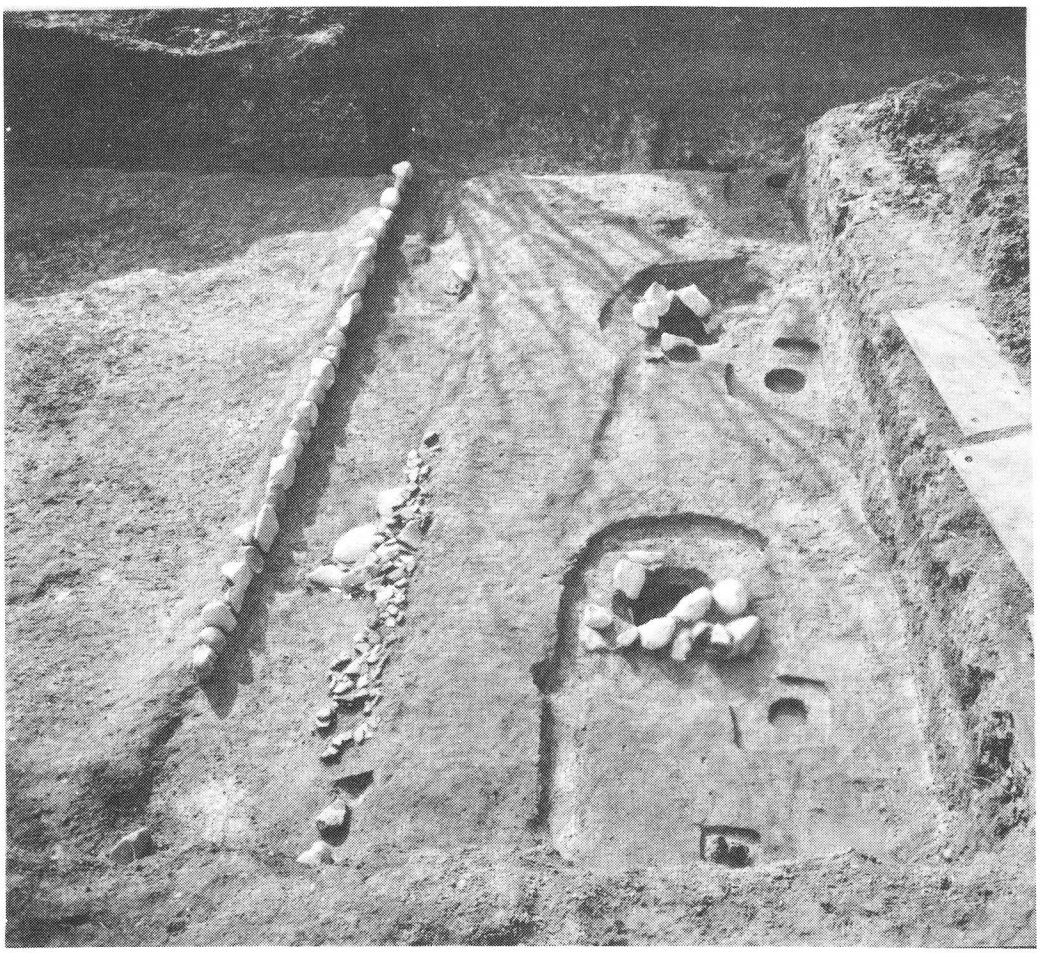
さて、今回の調査はその位置に経楼の存在が予想されたための事前調査でもあった。しかし、当初想定した位置に経楼としての遺構を検出することができなかった。そして、想定位置にかかって礎石立ち建物の存在することが明らかとなった。このことが直ちに、従来の成果にもとづいた伽藍配置全体や、ひいては伽藍中軸線が大きく異なるという問題に結びついてくるわけではないが、これらのことに投げかける問題はきわめて大きいと言え、今後の課題として深く検討せねばならない。

出土遺物は土器類と瓦類である。土器類の多くは土壙ＳＫ０８から出土したものであり、多量の土師器、須恵器とともに約１５０点にのぼる施釉陶器片が出土している。瓦類は古代から近世にわたる。軒瓦は軒丸瓦５６点、軒平瓦５２点である。法華寺前身建物で６２８５Ａ－６６６７Ａを組合わせて用いていたことが明らかとなり、京内邸宅使用瓦の一端が明らかになった。瓦類の中には、緑釉及び二彩釉丸瓦片が各１点ある。また、奈良時代後期の整土層からは三彩陶、二彩陶の破片が多数でた。

その他（第９８－１８）　この調査は、法華寺町における家屋改築にともなう現状変更事前調査である。発掘地は民家密集地で、法華寺町に属すが、平城宮と法華寺の間を南北に通る東一・二坊間大路推定地にあたる。

堆積土は単純な状況を示している。表土は黄褐色粘質土であり、地表下に暗黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、赤褐色粘質土の順に堆積しており、その厚さは約９０㎝である。遺構検出面は赤褐色粘質土面である。その下層は黄褐色砂質土であり、この地域での地山である。発掘調査は南北約３ｍ、東西約２.５ｍという狭少な範囲のため、わずかに赤褐色粘質土面が東に下降することを確認した程度であったが、東端で大きく下がる落ちこみの一部を検出した。埋土は灰褐色砂質土であり、土壙と考えるより、溝の一部とするのが適当な状況である。この溝を、仮りに大路東側溝とした場合、推定第２次内裏・朝堂院の中軸線と溝心までの距離が約５４０ｍとなり、位置的には妥当なものとなる。溝そのものは隣家にわたる

ために発掘できなかったが、平城京条坊に関する資料をさらに加えることとなった。



第14図　第98－17次調査遺構（東から）

Ⅵ　その他の発掘調査

平城宮西面大垣外の調査(第９８－１１)　建物増築にともなう発掘調査。西面大垣の西方約５０ｍ、西面北門前の条間路南側溝の遺構が予想された。敷地の南よりに東西４ｍ、南北７ｍのトレンチを設け２８.０㎡を調査した。

調査地の土層は、厚さ1.0ｍ内外の黄色粘土の盛土、旧表土(厚さ25㎝)、灰黄色砂質土(厚さ１５㎝)とつづき、灰紫色粘質土になると奈良時代の遺構面である。検出遺構は柱穴２であり、２.１ｍをへだてて南北にならぶ。トレンチが南に片寄ったためか、目的の南側溝を検出するに至らなかった。

下水道管理設工事にともなう調査(第９８－１４)　奈良県浄化センター建設事務所に協力し、下水道管理設工事にともなう調査を行った。

唐招提寺南門の東方、県道奈良・大和郡山・斑鳩線沿いの東側において、西一坊大路東側側溝を確かめる調査を行う。(次数外、1976年１０月１９日～２８日)

検出した遺構は柱穴２および土壙数カ所である。目的としていた西一坊大路東側溝は、発掘区内では検出されなかった。

発掘区内の地山は黄緑色の粘土で、その上層には瓦器・瓦片を混えた暗灰色の粘土が、厚さ４０㎝から１ｍにわたって堆積していた。暗灰色粘土の上層は水田耕作時の床土と耕土で、さらにその上に近年の造成による盛土がなされていた。

地山は南へむかって大きな傾斜をもち、そのうえ激しい凹凸があった。地山の絶対高は海抜５８.９ｍから海抜５９.６ｍである。

柱穴２は発掘区北西部の地山の比較的高い部分で東西に並んで検出された。西方は発掘区外となり、東方は地山の削平が甚しいため未検出で、遺構の性格をつかむまでには至らなかった。遺構の時期についても不明であるが、上述の粘土の推積より下層で検出されたので、中世を降ることはないと考えられる。もしこの遺構が奈良時代のものであるとすれば、左京五条一坊三坪の遺構ということになり、大路側溝は発掘区よりさらに西側の県道下に想定されよう。

土壙は発掘区全域にわたり、埋土に含まれる遺物は主として瓦器と瓦片である。

瓦の総量はセメント袋で一袋である。このうち年代の判明する瓦で奈良時代のものは、平城宮の６２３６型式一点で、他は一般の丸・平瓦である。

土器の総量は平箱に２ケースで、その大半が中世にぞくする瓦器で占められる。それらは鉢・皿の類で、ほとんどが破片であるが、保存がよく、１２世紀頃の瓦器の良好な資料である。

１９７７年１月から３月の間に、３次に亘って奈良県立奈良病院関連下水道管渠築造工事にともなう事前調査をおこなった。

a)　第１次調査として、１月１９日から２６日まで、奈良市五条町内に設定された発進坑No.３および到達坑No.４の２個所で発掘調査をした。両地点は唐招提寺南門に南接して東西に走る市道敷上に位置し、それぞれ南門心から約１１４ｍ、５２ｍ東にあたる。

立坑は東西6.5ｍ、南北3.5ｍほどの長方形で、四壁には長さ７～１１ｍの鉄製パイルを打ちこみ、バックフォーで旧水田床土と思われる青灰色粘質土面まで掘削・排土し、その後手掘りによる発掘調査をおこなった。

検出した遺構は、No.３、No.４ともに、近世および中世の東西溝各１条ずつである。これら東西溝は、その振れと両地点間の距離から考えると、各々が同一の溝である可能性が強い。本地点は平城京条坊における五条条間路の北側溝に該当する位置と考えられたのであるが、残念ながら奈良時代の遺構は検出できなかった。しかしながら、これら中・近世の溝が京の条坊を踏襲したものであった可能性は残る。ちなみに、中世の溝心は国土調査法第６座標系Ｘ－１４７３４５.５００ｍ前後を通るが、この値に朱雀大路の振れＮ１５′４１″Ｗを考慮するとＸ－１４７３３９.３００ｍ前後となり、平城宮第３９次調査で得た二条条間大路心の座標Ｘ－１４５７５１.９７７との差は約１５８７ｍとなる。五条条間路の側溝心心距離を４丈（１２ｍ）とみれば、両条間路心間の距離は１５８７＋６＝１５９３ｍとなり、３条分の距離（１８００尺×0.２９５ｍ×３＝１５９３ｍ）とぴったり一致するのである。

なお、No.４地点の近世溝内には大量の瓦が落ちこんでいた。いずれも瓦当面を

南に向けており、北に位置する建物からずり落ちたような状態であった。近世時には、溝の北側に唐招提寺と関連する築地のような構築物があったものと解し得る。

出土した遺物は、近世のものを主に、中世期のものを混じえ、若干の奈良・平安時代に属するものがある。瓦類はその量極めて多く、総量平箱２５杯分ある。近世瓦の中には特殊な刻印を有するもの２０種７６点が含まれていた。土器類の量は相対的に少なく平箱１杯程度、大部分が瓦器である。特殊な遺物として瓦質の火舎が挙げられる。No.３地点の中世溝最下層から出土したもので、鎌倉時代の作と考えられる。

b)　１９７７年２月２２・２３の両日、平松町内で第２次調査を実施した。調査地点は県立病院建設地の東南１００ｍほどの位置にあたる農道上である。当該地は水田畦畔の遺存状況から、また平城宮第１００次調査で検出した大路跡の北延長線上にあたるので、平城京右京三坊大路西側溝の存在が予測された。南北農道上で１０個、東西道上に２個の６０×１００cmほどのグリッドを設定し、南から１～１２と名づけて調査を進めた。５・１０地点を道幅いっぱいに拡大、また１１地点を東西に拡げた結果、これら３地点で３層に重複した南北溝各１条を検出した。これらの溝はほとんど遺物を含まず、ただ１０地点の中層溝から中世期の瓦片数片を得たのみである。したがって、各々の溝の年代決定は困難であるが、下層溝が三坊大路西側溝である可能性は残る。

c)　１９７７年３月２５日から３０日まで、第３次調査を平松町内で実施した。調査地は垂仁天皇陵古墳の西南約２００ｍ付近で、平城京条坊における二坊坊間の坪境小路に相当する位置と推定された。

下水管埋設用の掘削と併行して調査を進行した。現地表から1.5ｍほどまでは山砂による盛土で、盛土の下層は旧池の堆積土と思われる黒褐色粘質土（厚さ３０cm内外）とその下部の灰色砂（厚さ２０cmほど）が占め、さらにその下に厚さ５０～７０cm程度の青灰色砂質土層がある。以下は青灰砂の地山である。池の堆積土以下で断面観察をおこなったが、何らの遺構も存在せず、遺物の包含も認め

られなかった。

西大寺本坊の調査(第９８－１６)　１９７７年1月２６日と２７日の２日間、西大寺本坊内において、事務所改築にともなう事前調査を実施した。

調査地は、西大寺中大門推定地の南東約２０ｍの地点で、すぐ北に接して１９７５年１０月に同調査部が行った中大門推定地の調査では、西大寺造営以前の平城京条坊区画を示す一条条間小路の南北両側溝が検出されていた。

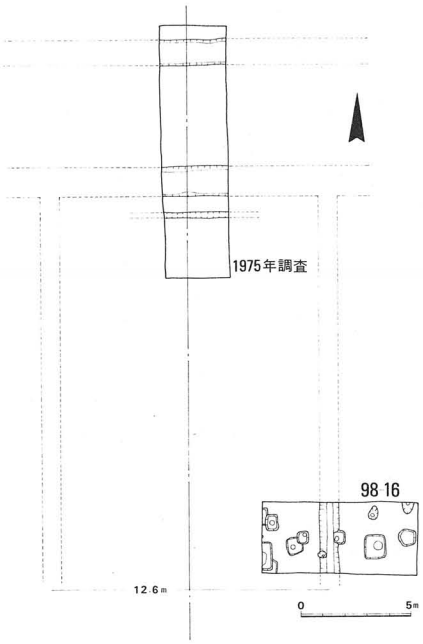
今回の調査では、南北3.３ｍ、東西7.１ｍの東西方向のトレンチを設定し、現地表下約８０㎝の地山面で、奈良時代に属する南北溝１条、柱穴１５ケ所を検出した。地山面から上には約３回の整地面があり、それぞれ、室町時代、江戸時代、現代の整地面と考えられるが、これらの整地面では明確な遺構はなく、わずかに江戸時代の整地面に赤く焼けた焼土面が認められただけである。

遺構としては南北溝と柱穴がある。南北溝は、上端幅９０㎝、下底幅３０㎝、深さ２０㎝の浅い素掘りの溝で、溝埋土中から奈良時代の丸・平瓦、土師器・須恵器が少量出土した。

柱穴は１５ケ所を検出した。小規模のものもあるが、一辺１ｍをこえる大形の掘形もある。調査面積が少ないために建物ないし柵としてまとめることはできないが、柱穴規模からみて、相応の規模の建物群であったと推定される。柱穴の重複関係から少なくとも２時期ないし３時期の建て替えがある。また、層位的には、柱穴群より南北溝が新しいことが確認できた。

南北溝や柱穴の柱抜取穴から、奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦類が少量出土した。いずれも遺存状態が悪く、小片である。

このような遺構は、西大寺造営以前に形成



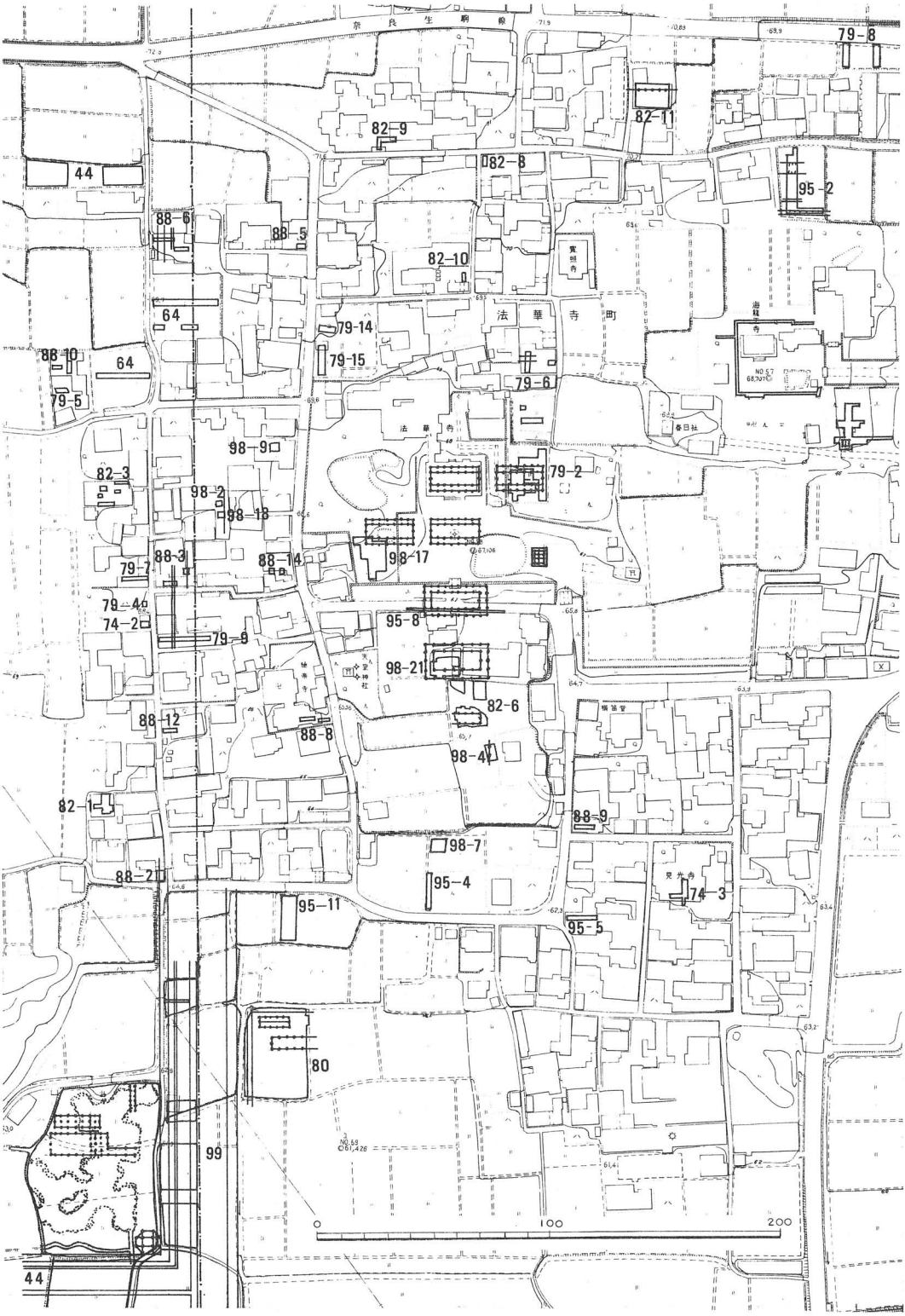
第15図　第98－16次調査遺構図

された住宅地にともなう可能性が大である。

法隆寺本坊西方地域発掘調査　この調査は、法隆寺寺務所新営計画にもとづく現状変更事前調査である。発掘地は、寺務所西側で大湯屋のすぐ南にあたる空地と、雑舎が存在する地域である。既存建物解体の関係から２次にわけて調査を実施した。発掘調査面積は６６４㎡である。

土層はおおむね単純な堆積状況を示しており、約２０cm～４０cmの表土層（黒褐色腐食土）直下は中世の瓦片や土器片を包含する黄褐色粘質土が約４０cm～６０cm堆積している。これは単一層ではあるが、西方では細砂を含んでいる。黄褐色粘質土の下層は、暗灰色粘質土層である。この層には古代から中世にわたる瓦及び土器片がわずかに包含されている。最下層は青灰色粘土であり、これは地山である。

建設予定地西半部の調査では、黄褐色粘質土面でも、暗褐色粘質土面でも、また地山面である青灰色粘土面においても何らの遺構も検出できなかった。東半部においては、地山面が比較的高く残っている。しかし、南にいくにしたがって次第に地山面は下降し、その上層は数度にわたる整地土が堆積している。これらのいずれの堆積土中にも近世の遺物が含まれており、しばしば大きく撹乱されることのあったことが知られた。今回の調査で注目すべきは、幅約２ｍの南北溝を検出したことである。この溝は、大湯屋の東方約１０ｍの位置を南流するものであるが、大湯屋の南端から約１２ｍの位置で終結する。そして、これは幅約５ｍの東西溝に接続する形となっている。溝から出土する遺物の中には近世に属するものも含まれているが、大湯屋の廃水を処理する施設であるとともに、大湯屋を区画する溝となる可能性も認められる。この他の遺構としては、長径約３ｍ、短径約２ｍ程度の池の一部を検出した。岸辺部に人頭大の石がいくつか残っており、底に小石を敷いているが、残存状況はさほど良好ではない。小規模なものである。



第16図　平城宮東院と法華寺の発掘調査位置図